

おっちゃんとインチョウの  
フランス旅行

大橋永美

新星出版

目次

1	はつぎこ	4
2	出発の日	5
3	パリ1日目	10
4	パリ2日目	22
	ルーブル美術館	23
	シテ島とポンヌフ橋	32
5	パリ3日目	39
	オルセー美術館	39
6	パリ4日目	44
	ベルサイユ宮殿	44
	クリニャンクール蚤の市	53
7	パリ5日目	58
	オランジュリー美術館	58
8	ルシヨン	69
9	ニーム	80
10	ゴルド	88
11	エクサンプロバンス	94
12	プロバンスの谷間の村	103
13	アヴィニョン	106
14	マルセイユ	109
15	カシ村クルーズ	117
	マルセイユ歴史博物館	117
16	リヨン	126
	ヨーロッパ・地中海文明博物館	118
	カシ村クルーズ	121
	リヨン美術館	127
	ノートルダム大聖堂	132
	リヨン染織工芸博物館	132
17	再びパリへ	136
	リヨンから再びパリへ	137
18	シャンゼリゼ	138
	PICARD	140
19	凱旋門	142
	イヴサンローラン博物館	144
	軍事博物館	147
	ロダン美術館	149
20	ポントワーズ	154
	カルチエラタン	150
	MONOPRIX	152
21	モンマルトル	164
	アラブ世界博物館	160
	クリュニー美術館	158
22	旅のおわりに	177
	モンマルトル博物館	165
	ケーブルカー	164
	ピカソ美術館	168
	ギャルリーラファイエット	170
23	後記	179

# 1 はじめに

おっちゃんと言チヨウは、  
2019年5月フランスを旅行した。  
おっちゃん64歳 ベンチャー企業経営  
言チヨウ63歳 耳鼻咽喉科医  
二人とも、いつの間にか還暦を過ぎ  
た。このごろ、ちよくちよく話題に  
のぼるのは

『引退したらどこで暮らす?』

……しばらくでいいから外国で暮  
らしてみたいな。

……ちよつとの間、日本を離れて  
生活するのも楽しいかな。

60半ばともなれば、そんな思いが  
心のどこかにある。異国の街で数週  
間過ごしてみたい。そう思いながら  
も、いまだ実現できていない。

ところが2019年は違った。  
ゴールデンウィークだ。10日あまり  
連続する祝日が入ったのだ。

……じゃ、パリはどうかなあ?

……フランスの田舎町なんかどう  
だろう?

思いつきに近いが、言チヨウに  
とっては初めてのパリだ。そうやっ

て行ってみたところフランスで16日  
過ごすだけでも体力、気力勝負。正  
直なところへ口へ口だ。

海外長期ステイなんぞ夢に描くの  
は簡単でも、そう甘くはないことが  
わかる。

でも、まずは、ここから始めよう。  
ここから始めなければ、何も始まら  
ない。

シニアにはシニアなりのフランス  
の楽しみ方がある。海外ステイがあ  
る。ここから、少しずつ、長期ステ  
イへと広げよう。

これは、シニアふたりのパリ旅行  
の顛末を記したものである。

これから先の長期ステイも、  
ここ、パリから始まる……

# 2 出発の日

4月24日の午後

おっちゃんと言チヨウは、パリに向  
けて出発した!と調子よくいくはず  
がトンデモナイ事態が発生。

人生、なにが起きるか予測できない。

さて、いよいよ出発しようという  
前々日。4月22日の夜。

おっちゃんが、慌てて言チヨウの  
クリニックまでやってきた。「早く来  
てくれ!ポーの様子がおかしい!」

ポーはうちの黒猫。腎結石をくりかえすため3年前に尿管形成術を受けている。

翌日には導尿のおかげで少し改善したものの、確かに調子はよくない。悪いことは重なるものだ。

「ポーがおしっこをまき散らして、自分のおしっこで全身ずぶぬれ。身動きしない」と、おっちゃん。  
「また腎臓結石が再発したのかな？朝はフツウに見えたけど」とインチョウ。

出発前日 4月23日のことだ。前々から体調が悪かったインチョウは、ついにダウン。右の背中の痛みがピークに達して、どうすることもできない。

ポーは腎結石のため排尿困難。動物病院の救急を受診した。腎不全のような症状が出ているものの、幸い早期に対応。そのまま数日の入院となった。

しかたがない。知り合いのM医師に診察を頼る。

おっちゃんは、じーっとうずくまっていたまま、おびえた目をしたポーを見て「旅行をやめよう。このままポーを置いていけない」という。

「あ、あのーすみません。そのあと、すぐにパリ行きの飛行機に乗るので、なるべく早めに診察をお願いします」

M医師は「はあ？アンタなにゆうてんねん。どこ？パリ？その日に

乗る？飛行機？」

近に陥頓している。このままではヤバイ。

そこからパリ行きに乗りかえるので……まあ、なんとか早めに。なるべく飛行機に間に合うように」とインチョウ。

(私のほうがポーよりも状態は悪い……)

「ははあ……この結石だな。背中が痛むのは」

このような激しく常識を欠く会話ののち、24日の午前中にエコーやら内視鏡やらの検査を受けることになった。

「どうしましょう……」

「まあ、大量の輸液で一気にがっつと利尿剤を入れてドンっ！と石を流し出してしましましょう」

痛みの原因を調べねばならない。午後には飛行機だ。

「えっ?!石を押し流すのですか？今から？」

パリへ飛ぶのだ。

「あ、あのうー私たち、あと数時間でパリに行くんですけど……」

早くなにかしらの対策を講じねば18日間もパリで過ごすことは難しい。その結果、インチョウの腎臓にも結石が多数発見された。それも両方の腎臓に結石がある。右の腎盂はかなり拡大していて結石が右腎の尿管付

集中攻撃だ！

こういう治療をパリ行きの搭乗数時

問前をお願いすることが医者として正しい判断か？どうか？議論の向きもあるが、さらなる難儀が先行した。つまり「腎臓結石押し流し作戦」の前に、インチョウは胃の内視鏡を受けることに。

尿路結石とは別に胃に病変がないかどうか？確認するのだ。

順序としては、まず内視鏡。そのあと利尿剤で一気に結石を押し流す戦法であった。

ところがだ。内視鏡の前投薬が強烈に効いた。効きすぎた。インチョウは、まったく目が覚めなかった。

「ほっといたら半日は眠り続けるだろう……」とM医師。

インチョウが診察を受けたのが午前8時半。麻酔から覚めたのが正午過ぎ。

M医院の午前の診療はすべて終了、外来には患者さんは一人もない。ようやく、ふらふらと起き上ったインチョウは、その流れで「利尿剤で結石押し流し作戦」を敢行！  
午後2時には空港に向けて出発せねばならない。急げ！急げ！

麻酔は翌日まで効いた。ものすごく効いた。

インチョウは、ふらふらする足取りで台湾行きの飛行機に乗り、でっかいスーツケースを押しながら、チエックインのお姉さん、イミグレーションカウンターのお兄さんにも舌がもつれつともなんとかしゃべり、パリ行き直行便に乗り込むや爆睡（シートベルトをしたこともオボエテイナイ）  
このことはヨカッタ。

24日の機内では、いっさい目が覚めずに昏々と眠り続けたのである。機内食もドリンクサービスも気がつかなかった。

しかし！利尿剤は違った。

利尿剤！結石押し流し！強行突破作戦！においては、

「あれっ？まったくおしっこが出ない」とインチョウ。

「逆なんじゃない？アンタおしっこ全然出ないよね」と、おっちゃん。

おしっこがまるで出ない。へんやなあ……

おっちゃんとインチョウは、いぶかしく思いつつ、パリ行きの深夜便に乗る。

異変は25日になってから。

突如として利尿剤が効きはじめた？状況は一変する。インチョウは30分おきにトイレに走る！

深夜便であるから機内は真っ暗。消灯している。寝ている。そこへ30分おきにインチョウが走るのである。トイレに向かって。

（ホンマ迷惑な客である……）

# Paris

## 3 パリ1日目

このようにして、インチョウは入口への状態でパリに着いた。時刻は朝7時前。シャルルドゴール空港はちなみに静かだ。タクシーでパリ市内に向かう。車で1時間ほどの距離だ。

シタディーン デイド モンパルナス (Citadines Didot Montparnasse Paris) ホテルに着くと、early check inを予約していたにもかかわらず午後3時まで部屋は空かないという。

午前9時から午後3時まで、パリ市内のどこかで6時間あまりを過ごさねばならない。

(とりあえず、そのへんをちょっとぶらぶらしよう)

Citadines Didot Montparnasse Parisホテルの周辺パリ14区は古い街並みらしく、どこもかしこも老人だらけだ……。どこから湧き出たもの



か？ ショッピングカートを引きずった(というよりショッピングカートに支えられた)老人たちが、とぼとぼと一斉にスーパーに入っていく。MONOPRIX。そして手にしたクーポンを確かめながら、その日の買い物をする。

その動作はゆっくりで、おしきせの日課なのだろう、知り合いと軽く

会釈をかわして店内に入ると、買い物かごをさげて、とぼとぼと食料品売り場に向かう。

(パリは老人の街だ)

それがインチョウの第一印象であっ

た。強くそう感じた。

よほどきりつめた年金生活なのだろうか、トマト一つ買うにも慎重にあれこれ吟味している。日本の高齢化も相当なものであるが、フランスもかなりの高齢社会だ。

老人が年金で慎ましくも平和に暮らせる国は、国政が安定している象徴に思える。民主主義の歴史の厚みでもある。平和であること、戦争がないことは、老人たちにさらなる長寿を促した。フランスは長い平和をようやく手にいれたのだ。



スーパーは、MONOPRIX, Franprix, Carrefour, Natural, Bioなどが、街のあちこちにあるが、コンビニみたいな小さな雑貨屋(バゲット、チーズ、少しの野菜やハムもお



いている(や、ソーセージやサلميを  
 売る肉屋も多い。冷凍食品の Picard  
 も老人たちに人気があって、冷凍の  
 カット野菜、TVdinnerやケーキな  
 どは、MONOPRIX Franprixなよ  
 りも Picard が安心。

3時にチェックインするには、ま  
 だまだ時間がある……

おっちゃんといんちヨウは、そろそろ  
 どこかで一休みしたくなった。どのあ  
 たりを、ぶらぶらしようかな……

ここで、おっちゃんの緊急事態が発生！  
 おっちゃんは、トイレが我慢できな  
 くなったのだ。焦ったおっちゃん  
 は、トイレを探してどんどん走る。

テキトウな店(マクドナルドかスタ  
 バか簡単なダイナー)が見つからない。  
 パリで公設トイレを見つけるの

は至難の業だ。

走りに走ってモンパルナス駅に駆  
 け込んだ。0.8€。駅のトイレは有料  
 です。

モンパルナス駅のすぐ前にそびえ  
 る高いビル。

「あ、あれは何かな？あのでっかい  
 ビル」「モンパルナスタワー」「あそ  
 こからパリを一望できるよ」

というわけで、モンパルナスタワー  
 に上ってみた。

入場料は1人あたり18€。パリに着  
 いたばかりで私たちは、18€がバカ  
 高いことに気がつかなかった。

3時だ。チェックインだ。ぼちぼ  
 ち帰りましょう。

帰路はモンパルナス墓地を横切って





モンパルナス墓地 (Cimetière du



ホテルへと歩く。  
地下鉄4号線 Asia・アレジア駅  
真上にあるサンピエール教会に立ち  
寄ると、新郎新婦が結婚式を挙げて  
いた。参列者は10人ほどで意外なほ  
ど簡素であった。

Montparnasse)であるが、ここは  
インチョウのお薦め。  
静かである。風が心地よい。樹木の  
緑が美しい。草花が色とりどりに、  
よく手入れされている。墓石には一  
族の歴史が刻まれて個性豊か。まさ  
に芸術的オブジェである。  
もし近所に住んでいたら、私はこの墓  
地の大樹の下に腰かけて、風の音を  
聞きながら日に何時間かは過ごすで  
あろう。お気に入りのベンチもある。  
読書したり、詩を書いたり、思索に  
ふけったり……。

さてその日の買い物である。  
バゲット  
バター  
牛乳2本  
オレンジジュース(すんぷらっ)



- チーズ3種類
  - ハム プロシュート
  - スモークサーモン
  - ビール3本
  - ワイン
  - トマト
  - ズッキーニ
  - レタス、ハーブ
  - ブラックベリー、イチゴ、オレンジ
  - クスクス1パック
  - 紅茶のティーバッグ2箱
  - コーヒー（インスタントとペーパーフィルター用ドリップ豆）
  - ジャム1瓶
  - ヨーグルト2パック
  - マカロニサラダ風惣菜
  - タルト菓子 2
  - サンドイッチ2
- 買い物袋はずっしりと重い。

ホテルの隣がスーパーで助かった。  
Franprix 合計50€ぐらい。なんと！  
50€も一度に買い物！  
このときの買い物が高額だった。





そのちマルセイユやエクサンプ  
ロバンス、リヨンでもスーパーで買  
い物をしたが、このときと同じぐら  
いの分量を買っても30〜38€を超え  
ることはなかった。

フツウは一回の買い物で18〜25€ぐら  
い。パリの中心部は割高かもしれない。

MONOPRIXに限らずスーパーで  
果物や野菜を買うときは量り売りで  
ある。

インチョウは最初、やり方がわから  
ず、トマト、ズッキーニ、オレンジを、  
そのままビニール袋に入れてレジに  
行ったところ、

レジのおばさんが「野菜はあそこで  
量ってからラベルを貼ってね」と注意。  
おばさんは「あつちをやり直して」と  
野菜売り場を指さす。



「えっ!どうやってラベルを貼るの  
か?わからない」とインチョウが答  
えると、レジには、たくさん  
の客がインチョウの後ろに並  
んでいたにも関わらず、イン  
チョウのところまで、いったん  
フツツとレジを閉めて

「オーケー。こっちに来て。  
教えてあげる」と野菜売り場  
までインチョウを誘導。

さらに驚いたことに、レジの  
おばさんは電動車いすであっ  
た。

(なんとという親切なレジおば  
さんのだろう……)

ここでインチョウは、野菜の  
量り買いを完璧にマスター。

Parisの部屋には、あらゆる調理器  
具と食器が備わっていた。狭いキッ  
チンであるが、これならなんでも料  
理できるぞ。

ホテルの隣に地元の人たちが集ま  
るパブのような居酒屋がある。

おっちゃんインチョウは、居酒屋  
で一杯だけビールを飲もうとした。  
じゃあ、ほんの一杯だけね……。

そこはtabac, loto, pressと看板  
にあるし、マスターの後ろの棚には、  
ぎっしりとタバコを置いているが、  
奥のスペースが立ち飲み屋だ。

わいわい飲んでる。へろんへろん  
と思われるが、ほとんど顔に出ない。

いつもの常連客たちが私たちにカ  
ウンターを譲ってくれて、いろいろ  
と話かける。



一杯のつもりが、3杯、4杯……と  
なって、10時を過ぎると店はシャッ  
ターをすべて閉めて監禁状態にな  
る。店内には常連客だけが、いつま  
でも気炎を上げて飲み続ける。おっ  
ちゃんといんちヨウの前には、地元  
のおじさんたちの「おごり」という  
ビールがどんどん運ばれてきて、次  
にはマスターの「おごり」ビールも  
やってきて、ずいぶん遅くまで盛り  
上がった。時計を見たら12時半だっ  
た。

私たちは、午前1時少し前には  
シャッターをすき間だけあけてもらっ  
てホテルに戻ったけれど、常連たち  
はまだまだ序の口らしかった。  
いんちヨウは英語しか話せない。彼ら  
のフランス語はまるでワカラナイ。  
おっちゃんが飲み屋の常連たちと話

した内容である。  
イキナリ！ものすごく厳しくたし  
なめられた。

「人前で決って財布を出すな」  
「財布のなかの札束を見せたらダメ！」  
「知らぬ間に財布ごと消えている！」  
いんちヨウには「リュックは後ろに  
持つな。ナイフで切り裂かれる。だか  
ら前に抱える」  
「in front of you!」  
と、きつくしかられた。  
バシバシ説教されていんちヨウは  
しょんぼり。

おっちゃんが最初にビール代の5  
€、そのあとオッサン連中におごる  
ために10€を財布から取り出すとこ  
ろを、しっかと彼らは見ておった。  
「ひとのまえで財布からカネを出し  
たら絶対にダメ！」厳しく、厳しく、

ものすごく厳しく説教された。

おっちゃんといんちヨウは、地元  
の酒飲みだけがたむろする立ち飲み  
屋が気に入った。

（入り口をちよいと覗くと立ち飲み  
屋はすぐわかります）

すごくくよい人ばかり。会話する  
とすごく楽しい。安酒場であるか  
らビールもすごく安い。

もしちょっとだけ、ここに住むな  
ら、お気に入りの立ち飲み屋をいく  
つか見つけたいな。あちこち、はし  
ごしたいよね。

# Louvre

## 4 パリ2日目

4月26日金曜日はルーブル美術館 (Musée du Louvre) に行く。

地下鉄を乗り継いでいくので、券売機で10枚つづりのチケットを買う。入るときにチケットを機械に入れると、そのあとの乗り換えは自在だ。

ここでアクシデントが勃発！

インチョウは、別の路線に乗り換えるとき、閉まりかかった電車のドアに体を挟まれた。地下鉄のプラットフォームは、ドアが二重になっているが、その両方に挟まれた。乗り遅れそうになって焦って飛び乗ったのがいけなかった。

(駆け込み乗車は危険です)

そんなのトックに常識なのだが、つい飛び込んだ。

日本の地下鉄のように、ドアを簡単に手でこじ開けることができると考えていた。まったく甘かった！

パリの地下鉄は、強力なプレスのようにガンガンと機械的に押してくる。インチョウの体は宙に浮いたままだ。そのまま電車は発進した。

このままでは死ぬ！電車に引きずられて死ぬ！扉に挟まれたまま電車は動きだす。必死にもがいてもドアに挟まれたからだは、スンとも動かせない……

そのときだ。

屈強な男性乗客3〜4人が、だつと走りより、むんずとドアに手をかけ、ありえないほどの怪力でインチョウを引きずり入れた。

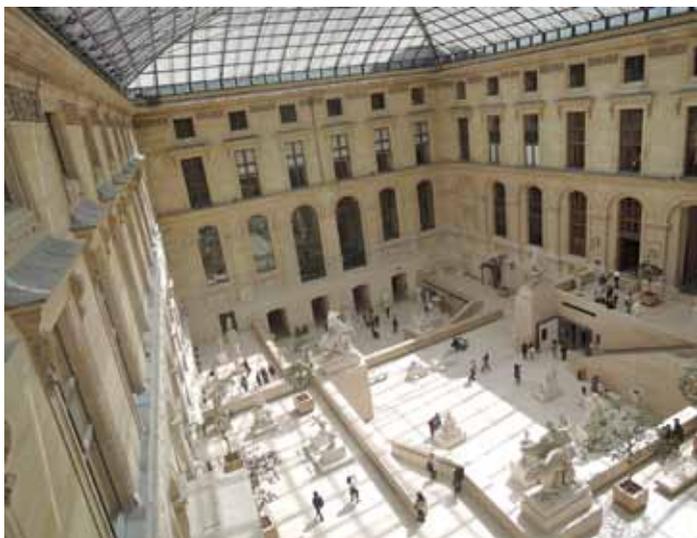
ポン！助かった！インチョウの体はドン！っと車内へ投げ込まれた。

その夜バスタブで紫黒のあざが、あちこちに出来ているのに気づいた。肩と腕と背中 of 皮膚が擦れて赤い生身がむき出ししている。危なかったなあ……

### ルーブル美術館

ルーブル美術館は、前日にネットで入館時刻を予約し、支払いを済ませていたため、待ち時間ゼロですんなり入館できた。スマホの予約画面





を入り口でセンサーにかざすと、待つことなく入館できる。

モナリザなどがあるルネサンス期の絵画が人気だ。体力、気力の留保を考えて、そのフロアーから攻略するのが正しい。ここはフランスでは1階、日本だと2階にあたる。

ルネサンスが、もっとも荘厳で力の溢れた作品群であるから、当然人混みは最高潮。ただし面積もでかいので、さほどのコミコミ感はない。その上階（日本だと3階）は北欧の絵画。ルネサンスの続きでそのまま上階に移動するのが正しいと思う。ここは穴場である。閑散としていて、じっくり見るにはとてもヨロシイ。

ルネサンスとロココと北欧のルーベンス、ブリューゲルやヴァン・ダ

## Café Richelieu

イクなどで4時間か5時間。あれやこれやを堪能したので、もう限界。足が棒です。

「おなかが減ってダメだ……」  
おっちゃんはエネルギーが枯渇。はや午後3時を過ぎた。入館したのが10時過ぎ。すでに4〜5時間は歩いている。

カフェは、あちこちにある。サンドイッチ、バゲットなど軽食もとれるテラスのカフェもあったらしいのだが、どこにあるのか？  
館内マップを見ても見当がつかず。地図を見ながらカフェを探し歩くと、カフェを探して移動しながらも、貧乏性でついでに絵画を見つまつので、どっちつかず。あっという間に4時近い。

焦るばかりで適当なダイナーが見つからない。

「おっ！ あったあった！」  
ようやくレストランらしい入口を発見。これが大失敗であった。

レストラン Cafe Richelieu は信じがたいほど不味い。そしてバカ高い。  
『教訓である』

ルーブルのレストランで決して食事してはいけない。カフェのケーキと紅茶。そのあたりで安く済ませるべきだ。シーザーサラダ23€、サーモンサラダ26€、オニオンスープ12€、ワイン2杯で16€。たったこれだけで77€。1万円払って、ここまで不味い食事はありえない。

ポウルに野菜をぶち込んだだけの萎びたサラダと、冷めきったスープとワインだけで1万円ですっせ〜おっ

ちゃんは、食事を目の前にして、ものすごく不機嫌だ。

インチヨウはネチッコイ性格である。(このレストランしか選択肢がないのだからか?) 館内マップをじっくり調べる。

「あっ！ ほかのレストランもあるみたい。地下一階とか地下二階とか」「あっ！ 通路だとカフェもある」「サンドイッチも」「売店横の通路での立ち食いはOkayらしいけど……」  
おっちゃんは「too late」むっつり黙っている。

あとから探せば、カフェは実際あちこちにあったし、館内マップにも載っている。だが、どこをどう辿れば、そこまでたどり着くのか？ ワカラナイ。





おっちゃんは、このあとずーっと  
「人生最大の失敗はルーブルのレス  
トランで食べたこと」と、しつこく  
しつこく繰り返すのである。

ハッキリ言って。ルネサンスだけ  
でも2時間は立ちっぱなし。相当な  
歩行距離である。さらに北欧。ここ  
も2〜3時間は歩く。階段途中にも  
彫刻なんかがある。都合4〜5時間  
立ち続けている。

おっちゃんもインチョウも、もは  
や不味かろうが、バカ高かろうが、  
ほかのレストランやカフェを探し回  
る気力も体力も残っておらず。従っ  
て、ようやくたどり着いた（偶然発  
見できた）レストランで食するしか  
チヨイスはない。動けない。足が棒  
だ。たぶん、ほかのテーブルの人も  
同じ気持ちだろう。いかほどに不味

くても、ほかを探すだけの体力が  
残っていないと思う。

「次は紀元前だ！彫刻と古代の調度  
類、装身具を見よう。さあっ！地下  
一階に出発だ」インチョウ。みなぎ  
る鋭気で次なるフロアーに颯爽と向  
かう。

それにしてもルーブルのスタッ  
フ。あの方たちは何のためにあんな  
に大勢いるのでしょうか？

I understood.

彼らは道案内なのです。インチョ  
ウも、地図を読む能力には自信が  
あったはずだが、マップを見て順路  
を進めども進めども目的地と合致せ  
ず。もしかして逆？なんでもスタッ  
フに道案内をお願いした。



そのうち（そうだっ！自分で地図を見るより館内スタッフに聞いた方が早い）と気がついて、スタッフを見つけては走り寄って地図を見せてしつこくしつこく質問した。

これが正解。ルーブルの正攻法。スタッフは単なる道案内。

もっと早く気がつけばよかった。彼らはトイレの案内係ね。それと迷子の世話係ね。

スタッフに芸術について質問してもムダですよ。念のため。

そして、館内の飲食事情については別の解決法もある。

インチョウは見たのだ。

柱の陰でカバンから、こそっとパンを取り出して、ささっと口に運ぶ人。窓の外を眺めるふりをして、素知らぬ顔でバゲットをほおぼる人。

そつそう！あれが正解！ルーブルの館内で飲食してよいか？ワカラ。が、気持ちはわかる。

もっとすごいのは館内でタバコを吸っている人を見た。ヴァン・ダイクの前で、電子タバコの煙がもくもくと上がるのを見てしまった！

絵画のまん前でタバコを吸ってよいか？ワカラ。けど、気持ちはわかる。

いったん入館したものの、圧倒的に多数の絵画と彫像、しかも広大な面積、部屋数の多さ、自分がどこにいるのかワカラ。

これって迷子だ。意識が朦朧とする。途中で休憩したくもなろう。腹も減る。足も棒になる。は、は、は、は、は……タバコ一服して何が悪い！

結局、おっちゃんインチョウは午前10時過ぎに入館して館を出たのが午後6時。出口にある売店をしばらくくろついで店を出たのが午後7時ごろだ。





## シテ島とポンヌフ橋

ルーブルから地下鉄で *île de la Cité*・シテ島に渡り *La Seine*・セーヌ川にかかる *Le Pont Neuf*・ポンヌフ橋まで歩く。セーヌ川クルーズの船が大勢の観光客を乗せて行き来している。 *Cathédrale Notre-Dame de Paris*・ノートルダム大聖堂の近くを歩いたが、ぐるりと柵で囲まれて周辺には機関銃を手にしたもののしい防弾チョッキ姿の警察官が大勢いた。

4月16日の火災で塔は崩落。焼け跡はきれいに片づけられていた。その隣の現役市役所は、歴史的建造物で一部を見学できた。

そこから *Sorbonne Université*・

ソルボンヌ大学界隈の *Quartier Latin*・カルチエラタンをぶらぶら歩く。ソルボンヌ周辺には書籍や学生向けの生活必需品の激安店などがあって日用雑貨、家電、家具なんでもあり。





インチョウは、パイレックスのあまりの安値に「わあ〜っ！安いっ!!」嬉々として店内に入るうとしたところを、おっちゃんに止められた。「Hクッカー？パイレックス？そんなんもん買って、どうやって日本に持って帰るの？」

はい。それもそうですね……残念。もしここに住んでいたならワタシハ絶対にごこで買います。明日も来ます。

ルクセンブルグ公園 (Jardin de Luxembourg)、ルクセンブルグ宮殿 (Plais du Luxembourg)、ルクセンブルグ美術館 (Musée du Luxembourg) と歩き、帰りは地下鉄でホテルに戻るいつもの飲み屋でビールをまずは一杯。

すっごーくいいオッサンのたまり場である。

とはいえ、インチョウはフランス語は全くワカラナイ。一人だけ女性の常連さんが英語を話す。

「フランスの第一印象は、老人大国である。日本とならぶ高齢社会ではないだろうか」とインチョウ。

「この先も増え続ける高齢者をどうやって国の財政で支えるのか？」インチョウが質問。

「日本のほうが高齢者に対する政策は充実しているのでは？フランス国民は高齢者を養う気などないわよ」と彼女。

(えっ！そ、そうなのか……)

「二番目の印象は、フランスは農業国だと思う。ヨーロッパの食を支える農産物の輸出国だと思う。フラン

スの主たる産業はやはり農業ですか？」とインチョウ。

彼女は「フランスの主たる産業はファッション。シャネル、クリスチャン・ディオール、イヴ・サンローランなどのオートクチュールや香水、宝石が国益を支えている」

「ええっ？ファッションですか？パリコレですか？」とインチョウは驚く。

「じゃあ、観光産業はフランスにとって重要ではないの？」とインチョウ。

「ほかの国だって観光には力を入れている」と彼女。

「えっ？そう？でもルーブルやベルサイユは世界でも有数の観光名所だと思っ。やはりパリは世界一の観光都市では」とインチョウ。



「そうではない。フランスは観光よりもファッションが重要な産業です。オートクチュールです」と彼女。「しかし世界人口の増加を考えたら、農業はますますフランスの優位な産業だと思うけど」とインチョウ。

「それは違う。フランスは遺伝子組み換え食品や、農薬や、いろんな安全規制が日本ほど厳重ではないもの」と彼女。

(そうなのか?……)

外から見るのと内とではずいぶん違うのかな?

そうこうするうちに……

酒飲みオッサンたちがインチョウを指さして盛んに何やら話している。あとで、おっちゃんに「何を話していたの?彼らは私を指さして何か

言ってたよ」と聞くと、

「いい女だなあ」とくに目が女優のような輝きをしている」

「まなざしが、まるで女優だ」とインチョウをしきりに誉めていたらしい。

ははあくそういうふうには酒飲みオッサンは女を口説くんだな。ナルホド。フランス男は女をほめるのが上手い。おだてる。

「あんたもフランス人を見習って、少しは誉め言葉を練習したら?」

「悪かったね。日本人で」とおっちゃん。

よく見たら、パブには90歳近い老人も混じっている。杖をついてゆっくりゆっくり歩きながら、夜ともな

ればパブに来てその日の酒と会話を楽しむのだ。老人は9時過ぎには帰っていく。もし女がその場にいたら、誉めちぎってくれるのである。90歳に手が届きそうな男でも女を見たらほめるのだ。

パリに住むなら、さりげない立ち飲み屋が近くにある場所がいいな……



# Orsay

## 5 パリ3日目

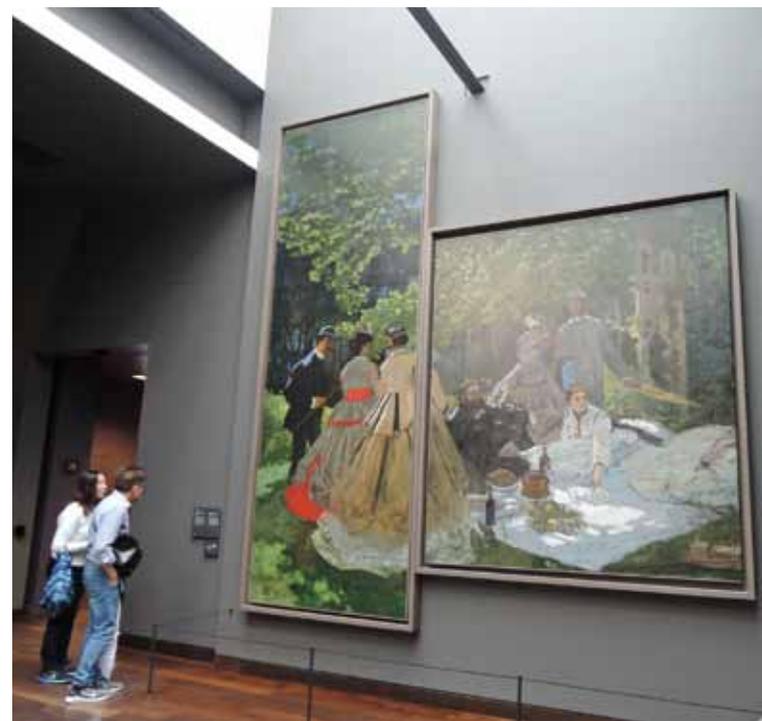
### オルセー美術館

4月27日土曜日は、オルセー美術館 (Musée d'Orsay) に出かけた。こちらはネットで3ヶ月先まで有効のチケットを購入できるが、日時を指定できない。そこはルーブルと異なる。

なので9時半開館に合わせて早めに行きましょう！と地下鉄で9時過ぎに到着。列に並んで10分ぐらい待つと入館できた。

9時半から午後1時まで2階から5階までをきっちり2度巡回できた。ルーブルよりも収蔵数が少なく館も狭いので、くり返し見ることができて、ぐっちょり充足感があった。





Musée d'Orsay





オルセー美術館から地下鉄12番線に乗る Montparnasse Bienvenue で4番線に乗り換えてホテルに帰る。地下鉄は面白い。

地下道のどこかで演奏するひとがいて、下手なバンドもあれば、かなり聴かせる弾き語りもある。ある時は十数名のクラシックの弦楽団もいた。

あと、地下鉄の車内で、突然すくつと立ち上がって朗々となにやら吟じる人がいる。

初めて見たときは、ちょっと驚いた。身なりが激しくみずぼらしいが、口調はジュリアスシーザーさながらにアップル。シェークスピア劇みたく堂々と響き渡る大声で何かを一通り口上すると、さくっと通路を過ぎる。その際に乗客からいくばくかの

小銭を受け取るのだ。「あの人なんて言ってるの？」とインチョウ。

「自分はサンドイッチを食べたい。しかしカネがなくてひもじい。もし小銭をめぐんでくれたらパンが食べると言っている。おっちゃんが解説。」

地下鉄はスリも多いが、堂々とパンを買う小銭をください！と、足早に通路を過ぎる物乞いにもプライドと愛嬌がある。地下鉄はパリの縮図である。

夕刻は日本からその日パリに到着するM医師を、ホテルまで訪ねる約束であった。M医師はインチョウがパリへ出発するまさにその日、にインチョウに内視鏡と腎臓結石押し流し作戦を実行してくれた医師である。奇し

くもM夫妻も、私たちと時期を同じくしてパリに旅行する予定らしい。

ラファエル通りとオスマン通りの角にあるデパート、ギャルリールファイエットのすぐ近くのバンクホテルで待ち合わせる。

地下鉄9番線でも7番線でもギャルリールファイエットに繋がるが、その日は14区 Alesia の4番線から7番線に乗り換えた。

バンクホテルの近くのビストロで夕飯を一緒にすることになった。シャンパンとジンとワイン。インチョウはビールを頼む。前菜と仔牛のステーキとスペアリブで食事は終了。土曜日の夜であるが、とっくに11時を過ぎたというのに地下鉄はかなりの混みようである。

# Versailles

## 6 パリ4日目

### ベルサイユ宮殿

4月28日の日曜日はベルサイユ宮殿に行く。「みゆつトラベル」という日本のパッケージツアーをネットで予約する。

オスマン通りのギャルリールファイエット本館前に7時50分集合。時間厳守とある。

このパッケージツアーには、ベルサイユ宮殿までの送迎バスと、入場券、音声ガイド（オーディオ装置を無料で借りる）が含まれている。日本円で1人5600円あたりか。

ベルサイユ宮殿は午前9時開館であるから8時過ぎには開門を待つ列がゲートの前にずらりと続く。その後最後に並んで待つのである。早く着けば着くほどよい。

ベルサイユ宮殿の公式サイトから、ネットで時間指定の入場券を手配すれば、別のゲートから入ることができる。手続きは簡単だ。

もし到着時刻がはっきりしておれ

ば、時間指定の入場券のほうが待ち時間は、はるかに短い。しかし、時間枠に人数制限があるのでネット予約は早めにするほうがよい。また、指定した時刻を3分過ぎると希望通りに入れるかちょっとわからない。

私たちは8時半にはゲート前に到着して、列に並んだのが8時40分ぐらい。そこから9時にゲートが開くのを待つのであるが、すでに200人か300人ぐらいの列ができていた。そのうえネットで時刻指定で予約した人が9時には入館を始めるので、私たちは9時30分ぐらいにセキュリティに並んだ。

荷物のセキュリティチェックを受けている間に、ずるがしく横入りする連中がたくさんいる。



9時を過ぎると行列は500人ぐらいに増えるので、優に1時間は門前に並ぶのであるから、ゲート横からするりと、すり抜ける輩も少なくない。

ベルサイユ宮殿は、様々な世界遺産ビデオライブラリーで紹介されているが、フランス国营テレビ監修が、群を抜いてすぐれていると思う。ビデオで何度も見て、その素晴らしさを堪能するのが正しい。ベルサイユ宮殿ホンモノの臨場ではニングンの垣根以外はなにも見えない。

横入りする、ずるっこい連中を見るには好適な場所である。

巧妙な手口で横入りします。「手持ちのチケットに不備があるから確認したい」とかなんとか言って、

入り口のセキュリティチェックまですーっと進み、入り口のスタッフに「チケット中に入って委細確認することがあるから」と、チケットを見せて堂々と進み、スキを見てサツと中に入る。ビューティフルな詐欺を目の前で見る思いだ。なんと素晴らしい！

いったん中に入ろう。(わあっくすっごくいい!)と思いたい。けれど人垣でなにも見えない。

ですから、こういう状況では天井と天井の梁。これだけに集中して鑑賞するのがよい。天井だけを見る。立派です。シユウブン立派です。最高です。

音声ガイドダンスなどいりません。ひたすら前に進むのみ。のちに自宅でベルサイユビデオライブラリーをと





くと鑑賞あれ。フランス国営テレビ  
監修にはニンゲンはいません。何時  
間でもじっくり見ましよう。

とにかく早く前に進んで、真っ先に  
トイレにたどり着き、いち早くトイ  
シを済ませる！これがベルサイユの  
正攻法です。

私たちは、みゆうトラベルの集合  
時刻まで、かなり余裕があったので  
庭に出た。

庭は人の気配がなく気持ちがいい。  
マリーアントワネットの離宮など  
は、歩いていける行程ではないし、  
特別なチケットも要る。たっぷり時  
間があるときに庭園だけを散策しよ  
う。ベルサイユは絶対に絶対に庭だ  
けを見にもう一度来たい。庭園を鑑  
賞するべし。見事だ。

ところで、みゆうトラベルのベル  
サイユツアーであるが。

7時50分時間厳守で、ギャルリーラ  
ファイエット本館前に集合するので  
あるが、私たちはホテルから地下鉄  
4番線で行くつもりであった。(つ  
もりだった……)というのは。

たまたま、その前日に地下鉄7番線  
に乗っていて、さて4番線に乗り換  
えようとしたとき、車内に

(日曜日は午前10時まで動きませ  
ん)という掲示があった。

おっちゃんはフランス語が読める。  
「あー明日は10時まで地下鉄4番  
線は動かないらしい」

「えっ！マジ？」「じゃあ明日ギャ  
ルリーラファイエットまでどうやっ  
て行くの？」

このように、地下鉄の運休を知っ



ておくことは大事である。地下鉄は  
ときどき動かないらしい。しかも突  
然（ネットでも運行を調べられる  
が、あくまでもフランス語だ）

私たちは別のルート、つまりロー  
rance 駅から13号線に乗り8号線  
に乗り換えて移動できたが、ほかの  
日本人は集合時刻に遅れた。彼ら  
は、なんとかしてたどりついたもの  
の、あやうくほっておかれるところ  
であった。

正直、フランス語は多少できない  
とまずい。

道を尋ねる。タクシーに行先を告げ  
る。どこかのバス停で地下鉄に乗り  
換える。どのような場合でも、地名  
をフランス語で正しく発音できない  
とまるで通じない。

逆にフレンチで地名を正しく発音  
できるのであれば、ベースが何語で  
あっても（日本語でも）たいいて通  
じるのだ。

そして意外に大事なのが数字。こ  
れをフレンチで発音できないとマズ  
イ。

ゼニ勘定ね。これって数字です。フ  
レンチで数字をはっきり告げない  
と、ゼニ勘定を誤解される。おっちゃ  
んはフレンチの数字には強い。

そのおっちゃんですら、スーパーで  
失敗した。シャンプーを買おうとし  
てリンスを買ってしまった（ようだ  
……）おっちゃんは、リンスだと思  
いこんでいるけど、私はボディ  
ソープだと勘違いした。でも本当は  
ボディコンディショナーのような気も  
する。

なので基本的な名詞を少しは知っているほうがよい。スーパーでも単純に失敗するから。

逆に英語であるが、ホテルにチェックインして翌日、フロントのコンシェルジュが、何やら私たちを呼びとめる。彼らはこっちに向かってわあわあ話しかけている。

「あれ？何かな？」

「私たちに何か言ってるよ。おっちゃん聞いてみて」

おっちゃんがフロントと話しているが要領を得ない。

インチョウは会話を英語に切り替えた。ホテル代の支払いが間違っていると聞き取れた。おっちゃんが英語でフロントと話をしたが、フロントの顔つきが(?)である。(もし

かしておっちゃんのネイティブの英語がまずいかも?!)

インチョウは、やにわにおっちゃんを突き飛ばすとフロントにのしかかるように英語で質問(ゼニがからむとインチョウは突然張り切るのである)インチョウの英語は単純である。

What むじやむじやむじや……相手は答える。

Why むじやむじや……

When むじやむじや……How むじやむじや……これで通じた。

フロントは「都市税は、昨日キャッシュで払ったけど、ホテルの宿泊費は支払っていない」と言っている。

私は「ネットでホテルを予約した時点でクレジットカードの番号を登録しているので、チェックインしたら

I don't understand what you say  
簡単でいい。

## クリヤンクール 蚤の市

M先生の誘いをうけて蚤の市へと足を延ばすことにした。

蚤の市は、地下鉄4番線の終点駅 Port de Clichancourt・クリヤンクールの近くにある。骨董品からジャンクものまで、なんでもありのお宝さがし。玉石混交だ。

インチョウは、シャンテリアや、リモージュの食器、18世紀ぐらいのアンティークリネン、骨董のビーズ、アフリカのオブジェなどを買いだかったけれど、おっちゃんがびったり横について厳しくチェック。買

自動的に清算されるのじゃあ、「いまカードで支払うのですか?」と聞く。「いまでもなくても明日でもチェックアウト時でもいいよ」「昨日、あなたたちがチェックインしたときは、あなたがすでに支払い済みであると誤解していました。あれは間違いです」とフロント。はい了解。

要点はいくつかある。おっちゃんのように本気の英語はアカン。ネイティブスピーカーもどきの英語では齟齬を招く。

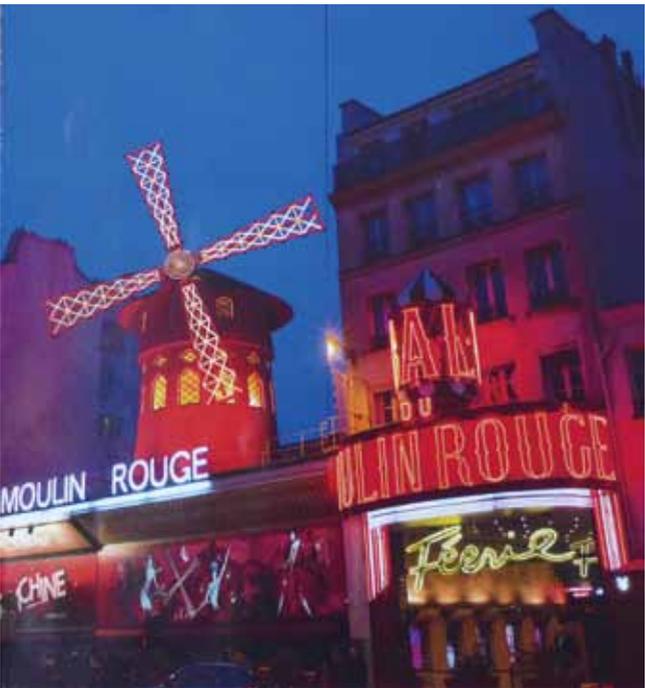
インチョウのせうじょ WHAT, WHY, WHEN, HOW……むじやむじやむじや……を繰り返すのだ。むじやむじやのあたりは、相手が聞き取るうが、こちらのすべてが通じまいが、どうでもヨロシイ。YesとNoははっきり言う。わからないうときは



## Clignancourt



うな！買うな！買うな！と目線で合図。  
 (そんなもん家にたくさんあるだろう！  
 なにも買うなっ！)とテレパシーを送る。  
 そうなんです。ワタクシ、骨董は置き場がないほど集めている。でも見たら買いたくなる。買ってしまおう。困ったことだ。  
 帰りは地下鉄4号線に乗る。クリニャンクール地下鉄駅周辺は、物騒で昼間でも平気で歩けるものではない。私たちは、わき目もふらずに地下鉄に走りこんだ。ところが、その地下鉄もダメ。かなりヤバイ。おっちゃんと言チヨウは、目立たぬように下を向いて、ちんまりしていた。  
 セーヌ川を越えたあたりから、ごくフツウの市民たちが降り降りする



せるツボを心得たプログラムだ。そして驚いたことは、食事が存外に美味しかったこと。(あれっ！ちゃんとしたコースディナーじゃん！)

ようになり、私たちのホテルに近づくと、治安の悪さもようやくどこかへ消えた。

夜はM夫妻と一緒にムーランルージュ (Moulin Rouge) に行く約束だ。ホテルに戻って、ドレスとスーツに着替えてからムーランルージュに向かう。

ムーランルージュは、モンマルトルの歓楽街にあり2号線地下鉄駅Blancheの真ん前にある。

ネットで予約しておいた席(特等席)にも、いろいろな段階があつて、よい席をわりあててもらうためには、入り口でスマホ画面のチケットをスキャンしたのち、パソコン画面の座席表を睨みながら、その日のテーブルを割り当てるコンシエージュに、いくらかチップをはずむ

と、同じ値段の切符でも、とりわけよい席を発売してくれる。

その座席券を受け取って、テーブルへと我々を案内する客席係が、さらに細かくテーブルをふり分けるような按配だ。客席係の掌にも、こそっとチップを握らせる。なにごとにおいてもチップの額次第となる。

Money talks.

宝塚歌劇とラスベガスのショウを合わせたようなにぎやかで面白い舞台と食事である。

6時50分入場で席につくと、すぐに食事がやってくる。バンド演奏はとうに始まっている。ショウは8時から11時まで。おおよそ午後7時から11時過ぎまで4時間たっぷり魅せる。ディナーとショウで460€がバカ高いと感じさせない。客を満足さ

予想以上の美味と巧く構成されたショウ。サービスも上々。

現場を采配するマネージャーが厳しくスタッフをコントロールしている。隅々まで目を光らせて粗相がない。客のちょっとした不備にも即対応する。しかも目立たぬようスマートに。彼らの気配りはプロとして特筆に値する。

ムーランルージュはセーヌ川を挟んでホテルと反対岸の右岸に位置する。橋を渡ってリブゴッシュ(左岸)のホテルに戻ったのが12時過ぎ。翌日4月30日はどこに行こうか? 朝からネットで行先を考える。

# Orangerie

## 7 パリ5日目

### オランジュリー美術館

私たちは月曜日でも開いているオランジュリー美術館 (Musée de l'Orangerie) に行く予定です。コンコルド広場(Place de la Concorde)の一角。地下鉄でもバスでも行ける。おっと……その前に、私たちは手持ちのユーロが乏しいため、日本円をユーロに替える必要があった。パリ市内でもどこでも両替できるものと、高をくくっていたインチョウは、ホテルの近くの銀行に入った。BNP PARIBAS。

(あーこの紙に記入するのだな)と、インチョウが用紙を受け取るうと手を出した瞬間、インチョウの傍にいた50代の女性が「ノン！」とスタッフにフランス語でなにやら咄めた。そして、くるっとインチョウのほうを向くと「銀行では外貨を交換できません。両替所に行かないとできません」と、その女性。

「えっ？銀行でできない？両替する場所って、この近くにありませんか？どこに行けばいいのでしょうか？」とインチョウ。

「両替所はこの近くにはないです」と女性。

「近くになくても、私は行かねばなりません。遠くでも行きます。どこに行けばよいか教えてください」とインチョウは食い下がる。



「地下鉄4番の入り口にバス乗り場があるので、バスで20分です。モンパルナスで降りなさい」と女性。

「えっ？なんですか？ワカラナイ。えっ！あーモンパルナス？」「駅を降りたらすぐに見つかりますか？」インチョウは焦る。

「はい駅の近くなら両替所がたくさんあるから、簡単に見つかりますよ」「20分ですね。by car?」「No, by bus」というわけで、なんとかしてモンパルナスに出て日本円をユーロに換金できた。

この経験から学ぶことは多い。一つは、外貨の換金は銀行では扱っていない。両替所に行く。もう一つは、銀行のように、ちゃんとしているはずの事務員でも英語



はいかげんであること。

あの場合、インチョウは銀行員が指定する用紙に記入したら窓口で換金できるものと想像していたのだ。ところが隣にいた50代の主婦は違った。

やにわに銀行員とインチョウの間に割って入ると、頑として「ノン!」「彼女は、そんなこと聞いてないのよ。日本円をユーロに換金できるか聞いているの」と銀行員を諷めた。彼女は（銀行では換金できないこと。どこに行けばよいのか。どういうルートで行くことができるか）を説明してくれた。

英語が話せる人が街の中にいる。かなりの数だ。それは職業とまるで関係がない。地下鉄に乗っているフ

ツウのおっちゃんだって、タクシールの運転手だって、英語がちゃんと理解できる人はいる。それも、ものすごく達者に話すのだ。

さらなる教訓として。

相手がウイ!といったところで、こちらの英語のすべてが、きちんと伝わったわけではない。なんでもかんでもウイ!と、言っている場合もある。いや、こっちのほうが多い。このことは、十分認識したほうがいい。このあとオランジュリー美術館に向かう。

モンパルナスから地下鉄を乗り継いでコンコルド広場に出ようとしてインチョウとおっちゃん、道の真ん中で地下鉄の路線図を開いて、どうのこうの悶着する姿が衆目を集めたらしい。

オランジュリー美術館まで、どの地下鉄を乗り継ぐべきか?おっちゃんは迷った。  
そこに……

80歳に手が届くかと思しき、上品な夫人が笑顔で近寄ってきて「どこに行くの?」「お手伝いしましょうか?」とインチョウに話しかけた。  
「オランジュリー美術館です」とインチョウが答える

彼女は sorry? pardon?  
インチョウの「オランジュリー」という発音が、まるっきり違っていたらしい。

フレンチでは、あ〜らんしエーのように聞こえる。ランの部分にアクセントはない。ア〜を長く発音する。

「オランジエ、アランジエ、あらん



じえー」焦って何度もそれっぽく言い  
なおすが、彼女の困惑はさらに増す。  
全く通じない。焦ったインチョウは、  
「ピクチャー、ミュージアム、ド  
ローイング、フェイマスアート、  
モネ……え〜とえ〜とコンコ  
ルド、テュイルリーパーク」いっぱ  
い叫ぶが、やはり通じない。  
発音がまるきり違っていているらし  
い。そこで、おっちゃんが登場。「コ  
ンコルド?」「イエス!」  
あ〜〜……ようやく通じた!  
バスで一直線。94のバスで行くよう  
に。夫人はバス停までインチョウを  
引っ張って行くと、路線図を指で示  
して、降りる駅はここ。赤いボタン  
を押すと停車しますからね。  
確かに!

94のバスは一本で通じており、夫

人が言う通り「窓から景色を眺める  
ことができるから地下鉄よりもバス  
がいいですよ」  
はい!その通りです。バスがイイ!  
バスと地下鉄は同じ切符で90分以内  
なら何度も乗り換えができた。  
この先はバスを利用するほうがイイ  
と思う。景色を眺めながら移動でき  
るのだ。地下鉄とも乗り継ぎ自在だ  
し、市民にとっては地下鉄よりもバ  
スがポピュラーな足だ。ただし、渋  
滞する時刻では地下鉄が便利だと思  
う。

オランジュリー美術館は、テュイ  
ルリー公園の一角にありコンコルド  
広場の前。エッフェル塔と凱旋門  
が、一直線上に見える平坦な場所に  
ある。

Centre Pompidou・ポンピドゥーセンターは、オランジュリー美術館から地下鉄で10分だ。どちらも地下鉄駅出口の近くに位置する。

オランジュリー美術館はモネの睡蓮の長大な連作で知られるが、そのほかに多くの印象派を所蔵する。特設のFranz Marcも力作ぞろいだった。

ルーブル美術館やオルセー美術館ほど知られていないようだが、ポンピドゥーセンターも所蔵の絵画や芸術品は多い。ポンピドゥーの美術館は上層の6階からで、それより階下は図書館で電子書籍がかなり充実している。地元の学生や主婦、会社員などが普段に利用している。

レストランとカフェは最上階と、

ほかあちこちにあるが、カフェでくつろいでいるのは地元の市民がほとんどで午後8時でも昼間とかわらない明るさであるから仕事帰りに利用するのである。値段もリーズナブルで、簡単な軽食が美味しい。

ポンピドゥーセンターは、午後6時30分以降はガラガラにすいていた。ここは穴場だ！

ポンピドゥーセンターの最上階回廊から望む市街はとても見晴らしがよい。ノートルダム大聖堂の焼け跡が近くに見えた。

30日はアヴィニヨンに向けて、TGVで移動せねばならない。準備をすませて早く寝よう！とか言っていたのに、結局寝たのは12時過ぎだ。

この時節、パリは日照時間がもの

すごく長い。北半球ね。夜8時過ぎても日没にはならず煌々と明るい。9時ごろからやっと暗くなるが、その時刻からそろそろ夕飯を作る。夕飯は冷蔵庫を空にするため、ありあわせで料理。残飯整理ね。マッシュルームをバターと生クリームで炒めて醤油で味つけする。

なぜ？生クリームか？という。インチョウはフランス語が読めない。なので、スーパーで失敗。白いヨーグルトであると信じて疑わずに、生クリームのパックを買ってしまった。ふたを開けて一口食べても（ヨーグルトにしては、えらい濃厚やなあ……めちゃくちゃ濃い）ぐらいに思っていた。

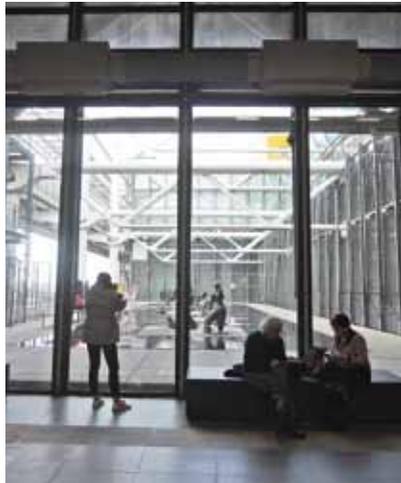
おっちゃんがラベルを見て「これ生クリームだよ」



「えっ?! そうなんだ……」  
そこでマッシュルームをバターで炒めて、生クリームを加えて煮込む。粉醤油で味付け。  
あっ！案外おいしい。「これ、いけるワ！」



*Centre Pompidou*



# Roussillon

## 8 ルシヨン

4月30日はTGVでアヴィニオン(Avignon)に向けて出発する。

TGVは、一般の鉄道とは別の乗り場があり、行先によって駅が異なる。私たちはパリのギャルドリヨン駅でTGV乗り場はホール2。フランスの鉄道の時刻表はきわめて正確だ。1秒たりとも遅れずに発車。

PhoneをPCでダウンロードするか、スマホのバーコード画面を入力できず。

駅にもおしゃれなカフェやMONO-PRIXがあるし、車内でも食事の販売があるが、私たちは冷蔵庫をからっぽにするために、その朝余りもののバゲットとバターとチーズとハムとサーモン、それからリーフレタスとトマトでサンドイッチをこさえてしっかり弁当持参である。

8時半にパリを出てアヴィニオンに着いたのが11時半。そこからレンタカーでRoussillon・ルシヨンに向かう。

おっちゃん、TGVの2階席でたらふく弁当を食べて満腹か?と思いきや、アヴィニオン駅のカフェのパン焼き窯から、ほかほかのパンが焼き上がるのを見てさあ〜どこかでランチだ〜と叫ぶ。

アヴィニオン駅のカフェはガラス張り、厨房でパンを焼く職人がよく見える。列車の乗り継ぎ時間が長い人と、カフェしながらPCを囲んで商談する姿もある。

田舎に行くほどパンは美味しくなる。パンに関して言えば、パリの観光客目当てのレストランは、まるで



Gare de Lyon



## Avignon



おいしくない。田舎がよい。  
バターも、チーズも、田舎ほどおいしい。ハムも野菜も果物も、田舎に移動するにつれて、はるかに美味しくなった。  
パンとバターは地元の人が食するものが基本美味しい。街角のパン屋さん。地元の人が朝から並ぶパンは美味だ。レジでは待った。いつも長い列があるが、待ったかいあって、さすがに美味しかった。たとえスーパーでも、タバコ屋のパンでも美味しい。コンビニみたいな店は日曜でも開いているが、そののバケット(0.99€)ですら美味だ。

レンタカーはアヴィニオン駅前にあるHertz。Hertzはフランスのあちこちにあるアメリカ系レンタカー

チェーンだ。

日本を発つ前にネットで5日間293€で予約したが店でGPS(カーナビ)とJAFみたいなロードサービスを勧められ、結局374€払う。カーナビが50€。ロードサービス31€。



アヴィニヨンからルシヨンは、まっすぐの一本道であって右折も左折も一切なし。ルシヨンに入る手前で、一回だけ左折して山道に入る。フレンチレンタカー初心者のおっちゃんといんちヨウでも、なんとか運転できた。

慣れない運転でインチョウが肝に銘じたことは、フランスは左ハンドル右レーン。どこかここで左折も右折もできない。

日本のように指示器をだせば、センターラインでもどこでも方向を変えられる状況では決していない。ただし、数は少ないが路面に左折のマークがペイントされている箇所であれば Okay (多くは交差点である)

もし右レーンを走行しつつ、左側に目的地がある場合は次のロータ

リーまで直進し、そのロータリーで Uターンして目的とする場所まで引き返さねばならない。

右折はロータリーのみならず、信号のある右折レーンを走行すれば可能だ。比較的簡単に思えるが、ロータリーではいったん減速し、慎重に左右を確認。

ロータリー前でイキナリの左折は不可だ。右からくる車を優先して譲らねばならない。左からも車は来る。ぐるぐるとロータリーを半周してのち左方向へと出る。間違ったら出られない。とんでもない方向に行ってしまう。

田舎道であるから、みなさん100キロ近いスピードで走っている。追い越し時は120キロ超。フツウ90キロ制限の道だ。それ以上に速度

をあげるとGPSが警告を発する。しかし周囲を見ても、制限速度の90キロを守っている様子はないのだ。

ロータリー以外では、誰もが直進するのみだ。だって120キロ超で走っているのだ。どのドライバーも、前の車がいきなりブレーキを踏んでプツン右折するだの左折するだの想像していない。急停止なんて論外だ。ひたすらまっすぐ前に進むのみ。

『ロータリーでしか減速して方向を変えることは許されない』

このルールは合理的であり、信号がまるでない(町の中にはあるが田舎には信号はない)ことから当然の理だと思う。私たちはポケットWiFiとGoogle Mapsで道順を確認できたので、すんなりルシヨンに到着できた。

Google Mapsは、日本語で誘導するので直進とか右折とかの指示は受け取りやすい。しかし、いざ道路上では、フランス語の道路標識が読めないといケナイ。地名と主要幹線名もフランス語で読める必要がある。ちなみにGPSはフランス語である。単語が読めて、発音できて、聞き取れないとマズイ。

Roussillon・ルシヨンに着いたのは昼過ぎ。アヴィニヨンから1時間だ。パリの喧噪にうんざりし始めていたおっちゃんといんちヨウは、「わあ〜……プロバンスだあ〜」田舎に興奮!

見渡す限りの田園だ。「すごくいい!」「やったあ〜っ!」牧草地と小麦畑とブドウ畑と一面の花畑。



ラヴェンダー農園があちこちにある。

ルシヨンは17世紀から18世紀のま  
まの町で、切り立った赤土の小高い  
丘にある。私たちがホテルに着いた  
ときは昼過ぎで、あっちこっちから  
の観光客で村はにぎわっていた。

夕方8時から9時ごろには、まだま  
だたくさん観光客がゆつくりと  
ディナーを楽しんでいたが、彼らが  
一斉に引き上げたのち、村は深閑と  
して闇と静寂に包まれた。

私たちはこの村に2泊する。ホテ  
ル Le Clos de la Glycineは偶然ネッ  
トで見つけた。ホテルは村の真ん中  
にある。バス停と郵便局の真ん前。  
肉屋の隣。タバコ屋と村に1軒しか  
ないスーパーのすぐそばだ。

村でもっとも見晴らしがよい場所

は、当ホテルにあるレストランのテ  
ラス。赤土の崖に張り出すように建  
てられたホテルの、さらに崖っ縁へ  
と思いつきりよく飛び出したテラ  
コッタのテラスでは、ディナーの席  
からライトアップされて鈍色に輝く  
向こうの断崖が見える。ホテルは深  
い谷の壁面に彫り込まれたように  
建っている。荘厳な景観だ。

レストラン David は、ミシユラン  
ガイド2019にも選ばれている。  
シェフのお薦めフルコースは38€。

でも、それよりもずっと美味しい  
のは、同じテラスで給される朝食の  
パンとバターとチーズだ。さりげな  
いけど美味しい。牛乳はさらっとし  
ていて甘味がある。バターとチーズ  
がこっくりと舌にとろける。





朝早い時刻が、日暮れて観光客がまばらになった頃あいに、村を散歩して、ようやく、そういった村の日常に気がつくのである。

まだ明けきらない村の、ほんのりと霞んだ屋根、朝露に濡れた石段、陽が暮れる間際に、薄紫の靄に包まれる石壁。この静寂を村人と共有できるのは、その地に宿をとっての醍醐味だ。

翌朝6時を過ぎると、あたりはもうすっかり動き始めている。

村の住人は大半が老人である。自分たちの朝食にと、*brasserie*の隣にあるパン屋に向かう。めいめいが帰路バゲットを片手にゆっくりと坂道を下っている。肉屋は朝早くから仕込みを始めており、幾人かは、店の戸をくぐって注文の品を頼む様子だ。

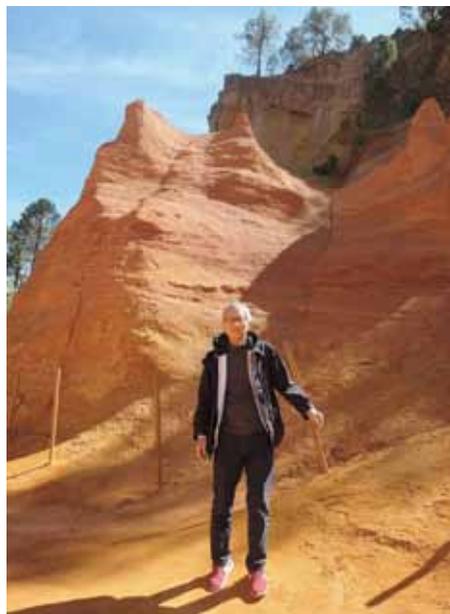


ここに2泊したのがよかった。中世そのままの石造りの並びにも、宿屋や土産物屋にはさまってフツウの民家がある。老人たちは、とぼとぼと、石畳の坂を上ったり下りたりしながら、教会の鐘楼の下に腰をおろしては、ひねもすしゃべっている。犬も猫も寝そべっている。よく見ると、ものすごく狭い石の階段のすきまに、小さな古びた木の扉がある。ひとの棲家だ。

ちよっと突き出した石段の踊り場の下にも、隠れるように小さな木の扉があり、さらにその奥には窓がある。村人は住んでいる。ひっそりと生きている。



と落ち合うらしく、猫は先に来て老婦人の戻るころには家の前に寝そべっている。  
猫は、老婦人がいつも餌を入れるカンカン（たいてい玄関の軒下に置



インチョウは、犬と猫を散歩させている老婦人と、何度かすれ違いうちに、片言で挨拶した。ここに来て初めて猫を散歩させている老婦人と出会った。猫も散歩するのである。どの猫も住人と等しくご老体だ。ゆっくりと歩く老婦人のわきで、猫も足元にすり寄っては、またしばらく離れて、どこそこに腹をすり寄せ、というような塩梅でしばらく老人の散歩におつきあいをするのであるが、

朝の散歩のおきまりのコースをめぐりすると、猫は自分の好きな道を勝手に家へと戻るし、老婦人は犬を連れてそのままパン屋に向かい、バゲットを買つと、なにやら友人と長話してもと来た道を引き返す。別行動ではあるが、家の前では自然

いている）をちょっとさぐって（あ……まだ餌が入ってないなあ）と日陰で老婦人の帰りを待っている。そのうち、犬の散歩から戻った老婦人がカンカンに餌を入れるのであるう。

インチョウは、その猫に向かって勝手に「キャッツ！キャッツ！」と呼ぶのであるが、猫は面倒くさそうな視線をインチョウに投げると日陰にべたっと腹をつけて横になる。



## 9 ニーム

Nîmes

5月1日の朝、私たちは昨日の猫たちとコッテリとあいさつを交わしたのちニーム(Nîmes)へと向かう。

ニームはローマ時代の遺跡が数多く残っている。Arènes de Nîmes・円形競技場の遺跡から大聖堂と神殿へは徒歩数分だ。パークキングは円形競技場の地下にあって、その出口は観光案内所のまん前である。

ニームから車で30分ほど走るとガードの橋がある。一世紀ローマ時代に建設された水道橋：Le Pont du Gard・ポンデュガードがガルド

上るっ！と。あっ？ダメみたい。えっ？ダメなの？

水道橋に入場できる期日が規定されており、事前に団体名で予約を入れねばならない。入り口は施錠されているのだ。一般観光客が突然の思いつきで上ることはできない。

橋のてっぺんから近くの山へと続くトレッキングコースは、キャンプ装具を背にボイスカウトの高校生らがテントをかついで登っていく。山腹では花が咲き始めており、じきに一面の花畑になるのだろう。

ニームは、フランス人はもちろん、陸続きに車でやってくるイタリア、スペイン人など近隣の国からの観光客が多いと見える。みな流暢にフランス語を話す。家族で川遊びを楽しむのだ。

ガルドン川では、カメラで川下り



ン川にかかっている。

おっちゃんとインチョウは橋のてっぺんまで登ろうと、10分からある砂利道をてくてく歩いて(あゝ)やっと着いたぞっ！さゝてっぺんに



もできて、水着で川岸から飛び込む人もいる。10メートルほどある崖から川の淵めがけて、飄々と落ちこちるようにジャンプするのである。飛び込んだと思ったら、また崖をよじ登っては、すーっと淵に身を落とす。川原では、キャンプングカーのそばにパラソルとテーブルを広げて食事している。田舎の休日だ。

EUは人の流れを自在にした。旅人は車でひよっと国境を越えるのだ。それにしてもキャンピングカーの家族連れが多いこと。

自転車やバイク、犬を連れてやってくる家族（これ本当に多い。犬連れね）がたくさんいる。

パリよりも愉快だ。爽快だ。開放感だ。



犬連れの老夫婦などは、インチョウが犬に話しかける（っていうか犬が自然に近寄ってくる、インチョウの足をクンクン嗅いでスリスリする）ので、インチョウが日本語でなにやら犬に話をする。そうすると、犬もその気になって、インチョウにジットリまわりつく。すると老夫婦がインチョウになにやら話しかける……という具合に、自然に会話（日本語と英語と犬語であるが）コミュニケーションが、しっかと成り立つのである。

午後5時過ぎにルシヨンに戻る  
と、村は、ほうほうからの観光客で、ぐっちょりあふれている。5月1日はフランスの祝日だ。

おっちゃんとインチョウは、ホテルの駐車場に車庫入れするにも気を遣う。細い道だ。しかも村で一つしかない信号機の真ん前がホテルの駐車場なのだ。観光客が、わんさかわんさか通り過ぎる状況で、どうやって車庫入れできようか？道幅は非常に狭い。

（今の今まですくっと安全運転してきて、ここで、ほけっと気が緩んで車庫入れに失敗?!こんなところで観光客と接触してもつまらん！）  
でも、ありえる。

あるある……あります……ありえます……入り組んだ石畳だ。  
車庫入れで間違っつて、石畳を踏み外すやもしれん。慎重に。くれぐれも慎重に。それほどにこの村は人気である。



観光客は村の人口の3〜4倍はいたと思う。車を駐車するにも観光客と競り合う格好になる。畢竟、互いの身をこするようになって行き交うのである。夜9時過ぎになると、ようやく静けさが戻ってきた。

さて……運転です。

おっちゃんもインチョウも、当初は右レーンで神妙に運転していた。模範運転と言ってよい。

そのうちに、ロータリーでナビが誘導する方向を一瞬の差でミスることがあった。ちよくちよくミスる。

（あっ！今の方向に進むべきだった。しまったー！）

（あ、行き過ぎたっ！）  
という瞬間。

ナビは当然であるが、ミスった

ら、そのまま直進して、次のロータリーでユーターンしてもとの道順に戻そうとする。大きく迂回させる。当たり前だ。GPSだ。しかし、しかしですよ。

田舎の道です誰も走っていない道路です。右からも左からも車は来ていません。

誰も見ていませんね。ね。そういう場合、ちよこちよこちよこつと、左のレーンに入って元に戻ったらダメでしょうか？

しょこしょこしょこつと、ユーターンしたら一瞬にして手間が省けるでしょ。

まっ！いいか、ここでユーターンしよう！そして、次第に大胆になった。えいっ！どこでもユーターンッ！

く。見た目も鮮やかなレッド、ピンク、イエロー！  
わあ〜……。

パリから脱出できてよかった。  
は、は、は、は、は……

腹の底から自然に笑いがこみ上げてくる！爽快だ！走れ！

どこまでも広がる畑と牧草地。小

麦か、ブドウか、オリーブか、あとは放牧。民家はまばらだが、それでも少し走ることに小さな集落がある。

プロバンス一帯はよく管理された農村だ。フランスの主たる産業が農業ではないか？とインチョウはしみじみ感じる。車で走るとその感は強くなる。

農村に入ると、ますますパンが美味しい。チーズが美味しい。バターが美味しい。果物が新鮮。そして甘い。ふ、ふ、ふ。

パリで5日過ごした私たちは、田舎のほうが数倍いいよね！美味しいよね！新鮮だよね！と感激した。

プロバンスの大きな果樹園のすぐ近く、路肩で果物を売る木の台がずらりといくつも並んで地元の人が車をとめてかご盛りの果物を買っている



# Gordes

## 10 ゴルド

5月2日朝。2泊したルシヨンをあとにしてゴルドに移動する。ルシヨンから車で15分たらず。

観光客でいっぱいになる前に、朝の静けさのなかでゴルドを散策しよう。9時前には村に着く。ゴルド

もルシヨンと同じく「フランスの美しい村」の選に入る。

第二次大戦後、この村の教会と古い建築物の多くが破壊され村は廃墟と化していた。それを復興させたのは Morand 夫妻、大富豪だ。19

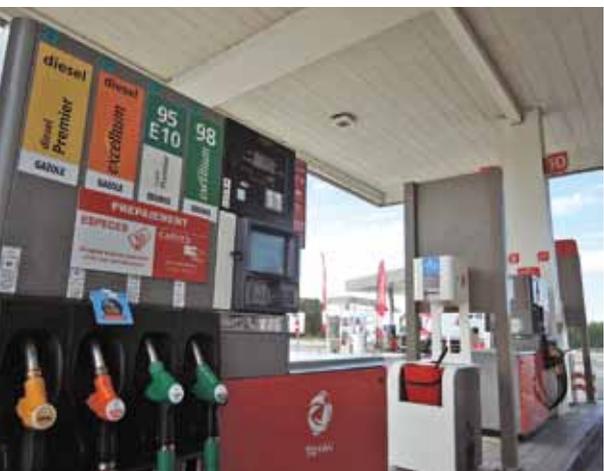




50年代から本格的な補修作業が始まり、今のような中世の面影を伝える町並みに修復されたのが1980年以降だ。なかなか根気と財力のいる作業であったが、そのかいあって村は今の姿に蘇った。

11時過ぎには村のすべてを見学した。執念深い性格のインチョウも、ねちこく、ねちこく、ねちこく2周半したあたりで、プツン見飽きた。「もうこのへんでゴルドはいいよね。コッテリ見たしね。さっ次行こう」とエクスアンプロバンスに向かう。時間はたっぷりある。

Aix-en-Provence・エクスアンプロバンスは、高速道路A7からA8を使うとゴルドから一時間ほどだ。高速道路はとても楽ちん。入り口



と出口さえ誤らなければ、ずっと目的地に到達できる。南プロバンスのどの都市に滞在しているようにも、ニースでもカンヌでもマルセイユでも、すんなり一直線で行くことができる。中途のパーキングエリアで休憩しよう。めっぽう面白い。パーキングにある売店やカフェはその地の特産品なんかを置いているし、休憩の仕方も、めいめい家族で個性がある。眺めているだけで楽しい。

ガソリンはもちろん充填すべきだ。次のガソリンスタンドが、走行する道なりにあるとは限らない。トイレ休憩と同時にガソリンも補充するべし。

高速道路の欠点は、地図にないほど小さな、しかし風情のある中世の村を、偶然にせよ発見するチャンスを逸することだ。

# Aix-en-Provence

## 11 エクスアンプロバンス

エクスアンプロバンスはゴールドから高速道路で1時間。ここには歴史的建造物が多い。町で韓国人か、あるいは台湾人と思える中年夫婦と偶然にすれ違った。アジア人と出会ったのは本当に久しぶりだ。思わず目があつた。

エクスアンプロバンスは小規模な

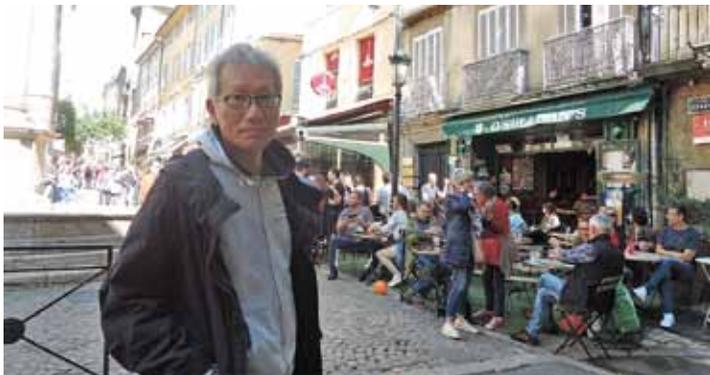


がら産業の中核としての機能を果たしており、フランス南部の政治的要所と見える。中世が残る街並みを環状一点の芯にして、そこから放線状に、商業施設や住宅が構図よく配置されている。旧市街のご真ん中、地下5階まであるパーキングに車を止める。



エレベーターで地上に出ると、頭上にあるのがショッピングモール。ここが旧跡の中心になっている。ブランドも若年層を狙ったものが主流だ。ZARA、H&M、Repettoほかにも、なかなかの高級デザイナーズブランドがずらり。バンバン売れている。店の盛況ぶりからも窺えるが、経済は活況だ。大きなショッピングバッグをいくつも抱えて歩いている。何より町の人がピカピカにおしゃれでカッコイイ！パリなんて霞むほどだ。ここは若者の町である。

モールの一角にツーリストセンターがある。ここで観光案内を申し込むと、市電（遊園地のお子ちゃまトラムのような）で市街地の観光スポットをオーディオで解説してくれ



る。耳に挟むとトラムがとまるスポット毎に自動音声流れる40分のコースだ。

これをツーリストセンターで申し込む外国人がおおぜいいた。大所帯の団体さんである。トラムは2車両あるから大丈夫。たいして待たずに乗れる。

私たちは、ツーリストセンターでもらった市街地図を片手に徒歩で回る。2時間ぐらい。

ここはニームよりも都市の経済規模がかなり大きいようだ。地元の人にはカフェしたり、ベンチに座ったり、明るい日差しをゆっくりと楽しんでる。

エクサンプロバンスのHotel de Caumont-Centre d'Art・市民美術館では、その日はグッゲンハイム美術館が所蔵する印象派の絵画展が催

されていた。幸運だ。

セザンヌ(エクサンプロバンスはセザンヌのアトリエがある)ゴッホ、ゴーギャン、ピカソ、モネ、マネ、マチス、スーラ、ドガのブロンズ……たくさん印象派があって、



しかも館が歴史的建築で庭園も涼やかだ。  
私たちが偶然足をとめて立ち寄ったエクスタンプロバンスの小さな美術館ですら、これほどに質の高い印象派をそろえている。

あ、もう2時間半かそこら。そろそろ午後6時だ。帰ろう。ゴルドに向かって帰路をとる。帰りは高速道路を通らずに、山越えでゴルドまで戻る。これがよかった。小さな山峡にある中世の街並みや古城を訪ねることができた。

もし高速道路や主要な幹線道路を走ったなら、そういった小さな中世の村を知ることがなかったと思う。古びた石造りの城と集落を目にする機会はなかった。

ヨシッ！この次は地図にもない田舎の中世の集落を訪ねよう！

「すごいなあ……いいなあ……」おっちゃんと言っちゃヨウは興奮する。でも、こういう「偶然現れる中世」と出会うためには高速道路を避けて、主要幹線も避けて、ナビにもないような山越えの道を、ひたすらぶっ飛ばさねばならない。これ、ホンマ、なかなか、たいへんでございましたわ。

いくら少年のころプロのレーサーを夢見たおっちゃんと、臆病で小心でもブチ切れたら突如！瞬間湯沸かし器のインチョウと、二人組であったにせよ、山道は九十九折。道幅は狭くヘアピンカーブの連続だ。

走っているのはガンガンぶっ飛ば

してくる村人の車のみだ。後続の車が急峻な坂道であれ、羊腸の小径であれ、いつ頃にスピードを落とさない。私たちが70キロくらいでフツウに走行していると、ピタッと後ろにくっついてくる。だから、こっちも、ますますスピードをあげてぶっ飛ばす！

山道を危険な速度で走ってよいかどうかは、後日、法的に検証するにせよ、その刹那においては後ろの車にせかされてこっちも必死！時速100キロ超だ。いやもっと出ていたかも？

ニッポンであれば「あおり運転」たら、犯罪になるほどの猛スピードで山道走るのだが、彼らはベツダン悪気などない。ごくフツウに運転していると思う。

こっちも山道を100キロ近いス



ピードで走っているわけで、トロトロ運転しているのでは決してない。しかし後続の車はピタッと後ろにくっついて離れない。追いつける。

あゝ疲れる……

ホテルの駐車場で車を降りたときは、アタマがふらふらした。膝がぐがくして立ちあがるのがやっと。流石！ここは『ル・マン』の国。命知らずのレーサーを生む素地はそこかしこにある。



# Provence

## 12 プロバンスの 谷間の村

岩壁のあいだに細く走る山峡の道は、舗装が行き届いて、サイクリングか、バイクツーリングならさぞ気分爽快だろう。谷の斜面に花畑もあれば、切り立った岩肌にへばりつく小さな花の群生もある。中途に小さな集落がぼつぼつある。その集落のstacに入ると、そこはたいいてい中世そのまま。石造りの壁と、床と、はりの太い天井はまるで薄暗い。自転車の仲間が民家で宿を借りるようだ。雑貨屋か tabac で牛乳、野菜、果物、そして肉屋でソーセージやハムを買つと、道端の石段で手





軽にサンドイッチを  
こさえて休憩してい  
る。

インチョウウはそれ  
を見て、この次は自  
転車であちこちの集  
落を回ろうか?と真剣に考える。  
おっちゃんはバイクが気になるら  
しい。おっちゃんの父親は半世紀むか  
し、BMWのオートバイで田舎道を  
ぶっ飛ばしていたらしい。この次に  
来るときは、バイクで古城を回る旅  
にしよう!なんてね。おっちゃんも  
ちよっと本気。

バイクファンが大勢いるらしい。  
プロバンスの中世の面影をのこす  
村々には、ちよくちよくデッキカ  
イクが止められており仲間  
で村を周回するようだ。自  
転車もそうだ。古

城の城壁でいくつもの自  
転車が立っかけているの  
を見かけた。

キャンピングカーの後ろ  
に自転車を数輪たばねて  
括りつけて走っている。  
ああ、ああいう旅もい  
いだろうな。私たち自  
転車もいいかもね。

「おっちゃん。私たち  
も、あんなふうに、  
キャンピングカーであ  
ちこち訪ねて、時には、そ  
のへんの民宿に泊まる  
のもいいかもね」  
インチョウウは、ほ  
ぼその気になっている。

こういうのも、  
ちよっとイイ!  
うん絶対イイ!





# Avignon

## 13 アヴィニオン

翌日5月3日は Marseille・マルセイユに移動する。

アヴィニオン駅にレンタカーを返却したのち、TGVでアヴィニオンからマルセイユに移動するのだ。

私たちがアヴィニオン駅についたのが9時半。TGVの11時半には、まだまだ時間がある。

じゃあ、アヴィニオンの教皇庁と宮殿を見てから車を返そうよ。

レンタカーであちこちの旧跡を回るとき、先立つ心配はパーキングである。旧跡のパーキングはたいていが、その歴史的建造物の地下にある。

なので、史跡に近づいたらナビでパーキングの入り口を探さねばならない。

ナビがちょっとした遅れたら、パーキングの入り口をミスってしまつて市街をぐるぐるを探し回ることになる。

したが、車掌はチケットを確認しにやってこなかった。しかもプラットフォームは切符なしに、すんなり入れる。

ええっ?!それで Okay?

これってアリなんだ。乗り降りには自在。従つてTGVはごく近距離なら無賃乗車が可能に思えた。席はガラガラでした。



マルセイユまでは、TGVで30分足らずだ。私たちは、市街地を散策してのちエロワにレンタカーを返却すると、アヴィニオン駅のカフェで朝食を食べた。カフェオレ2つと、バゲットサンド、サーモンサンド、チョコチップクッキーの合計で22・7€だ。クッキー1枚3.6€ってどうなん?!高すぎない?

マルセイユまでの約30分、私たちはTGVの座席券も特急券もネット予約しe-ticketを携えて乗車

# Marseille

## 14 マルセイユ

マルセイユは、地下鉄 Colonne 駅の真上、Stacyty に泊まる。港までは徒歩10分たらずだ。ホテルのキッチンには調理器具が今までに泊まったどこよりも充実していた。私たちは、たいてい夜はホテルで食べる。旧市街の港に面したホテルは人気だ。バルコニーに出ては海を眺めるのだ。

2日滞在した間に、中国人の団体と出会ったが、彼らは写真を撮ると

ミニバンですぐにどこかへ移動してしまった。日本人はついぞ見かけなかった。マルセイユは治安が悪いという風評のせいか、日本人には敬遠されるのかもしれない。

そこかしこにアラブ人や東南アジア人の経営する料理店やスーパー、果物屋があって、ベトナムやインドシナ半島の言葉は拾えるが、街に出て英語はまず耳にしない。たいていフランスかスペイン、アラブ語圏の影響である。でも、ほとんどの人は英語を臨機応変に使える。マルセイユは、母国語のほかに2か国語は普通に話せるレベルだと思う。





早口のフランス語でまくしたてられたインチョウがとまどった表情を浮かべると、彼らはすぐに英語に切り換える。この街のほどこでも英語が通じる。

マルセイユは独特の雰囲気の間だ。この地で「異国情緒」などと言うのは適切ではないが、フランスとはおおよそ異質の香りがする。北アフリカ、アラブ、ポルトガル、スペイン、イタリア……ほうぼうの文化が渾然と融和したような匂いだ。インチョウは一瞬にして、この奇妙な混沌と熱気が好きになった。

どういうわけだろう……アルゼンチンタンゴが似合う街。強くそう感じる。

食事は美味しい。というのも、いろいろな人種、文化が融合した場所

そして光。ここは地中海だ。

光、光、光……いたるところ光があふれている。そして風。そして太陽。

私たちは、マルセイユで初めてガイドを雇った。パリでも、エクシアンプロバンスでも、ガイドは必要なかった。英語はどこでも通じたし、おっちゃんフランス語でたいていの用事は済ませることができた。しかし、ここマルセイユは治安が良くないという風聞もあり、心配性のインチョウはネットでガイドを予約した。英語を話せるガイド。

やってきたのはAxelleさん38歳。8人ぐらいのグループで雇う団体専用のガイドだ。ガイド料金は3時間が、380€と高額であったから、私たちのほかに申し込みはなく、時

であるせいか、フランス料理然とした洒落た食事は少なく、ブイヤベールは有名だが、ほかにモロッコ、チュニジア、スペインなんでもありの多国籍料理だ。

港の労働者たちが昼飯にパクっているテイクアウトのピザを食べたが、ものすごく美味しい。ほかほかのピザの生地が香ばしい。熱くとろけるチーズが美味しい。シーズニングが舌に旨い。庶民受けする味だ。1ホール10€を立ったまま一気におぼった。

マルセイユの印象は、第一に美味しい！すぐ美味しい！場所を問わず、どのテイクアウトも美味しい！第二は、多民族の渾然としたエネルギー。熱気だ。民衆の体温で蒸散する汗の匂い。

間をこちらが自由に指定できた。私たちの貸し切りガイドである。

彼女は普段はイタリア語かスペイン語でガイドをしているという。生まれも育ちもマルセイユ。生粋のフランス人。40歳になったらキツパリと仕事をやめて世界を放浪する旅に出るそう。彼女のおかげで3時間きっちり徒歩で街歩き。旧市街の要所を完璧に制覇できた。

旧跡だけではない。第二次世界大戦の直後に荒廃していたという淫靡な裏通りや、そのころの闇市や娼婦街など、かなりいかげわしい界隈も散策できた。いまでは、それらの無法地帯も海外から移り住んだ芸術家たちがアートビレッジとして、ちよつとした観光スポットに変貌させた。それらの淫猥な路地裏はガイ

ドなしでは危険だと思う。

食事であるが……ルシヨンとゴルドで宿泊したホテルがミシュランのシェフで、前日も前々日も夕飯はフルコース38€（ルシヨン）と49・9€（ゴルド）。連日のフレンチで、堪能というか、食傷気味というか、辟易というか。

おっちゃんは、今夜はおかゆが食べたいそうな。うん、そうね。日本食がいいな。胃袋が疲れているし。で、近所のスーパーで食材を調達。

グロースリーストアはあちこちにある。ホテルの近くは肉屋とパン屋が野菜売りの近くに集まって、そこらは、ちょっとしたアラブの市場だ。ベトナム人が経営する食料店も

多い。私たちはカルフルまで出かけるのが億劫で、つつい、そこで用を足す。

まず、野菜ですがプロバンスと値段は変わらない。パンもほぼ同じ値段かな。バゲットが1ユーロ以下です。0.9€前後。塩バターの小さな塊が1€ちょっと。牛乳も2€前後。ワインは4〜5€で上等。ビール500mlが1.8〜2.6€ぐらいだ。

果物はプロバンスのほうがイチゴなどのベリー種は美味しいと思うが、特筆すべきはマルセイユのオレンジ！とびっきりの美味。あと、パブリカも甘い。同じ店で水、紅茶、米を買う。今日の買い物は、これぐらいにしておこうかな？合計35€。

水ボトル3本とワインとビール3本で重すぎて運べない。とおっちゃん

んがヘタってしまった。そうそう。野菜とイチゴとオレンジが重い。牛乳はデカイボトルだし、チーズとハムと腸詰めとバターとなると、さすがに重さは半端ではない。長いバゲットもバッグからはみ出すし。

ホテルに戻る。鍋で炊いた白米

と、わかめの味噌汁、にゅうめん、塩昆布と、おかかのふりかけ。パウダー醤油を日本からたくさん持ってきたのが正解だ。米はスーパーでも小さなパックで売られているからIH鍋で簡単に炊くことができる。

フランスでは米は菓子づくりに使





うのであろうか？タイ米が小さな紙の袋に入って1.5€ぐらいだ。マルセイユでは、パリに比べて食料品の値段がずいぶん安く感じられる。

ところでマルセイユはとっても気温が高い。テレビの天気予報でパリが5度から10度とあるのに、ここは22度である。天気は上々。日向はさらに暑い。北のパリから南のマルセイユまで移動すると、気温は10度から15度の開きがあるので衣裳はガラッと変わる。5月の街歩きはものすごく暑い！

ただし、冬は山からの突風にさらされて雪が舞うことがあるそう。ガイドのアクセルさんは20年ごとに大雪が降るといふ。マルセイユは坂の街である。2日間ずっと雪に降り

こめられると、そのまま転がり落ちそうに急な坂は車が通行止めになる。そんな日は急な斜面で大人も子供もスキーをするのだという。



## 15 カシ村クルーズ

5月5日は土曜日だ。おおぜいの観光客がマルセイユへとやってくる。街は観光バスでいっぱいだ。狭い石畳を路面電車と2階建ての観光バスが上手にすれ違う。

客のお目当ては、港にあがったばかりの採れたての魚をやけつくような日差しのレストランで食べて、飲んで、しゃべって、ずらっとナンニモシナイことなのか？

私たちは朝からマルセイユ歴史博物館とマルセイユ美術館へ行く。

**マルセイユ歴史博物館**

マルセイユ歴史博物館 (Musée



d'Histoire et Port Antique de Marseille)の敷地では、今も遺跡の発掘が続いている。

掘で囲まれた発掘現場は博物館の敷地であると同時にショッピングモールでもある。つまり地下2階から地下1階までが歴史博物館、地上階はショッピングセンターだ。

## ヨーロッパ・

### 地中海文明博物館

Mucem(ムケム)は要塞である。マルセイユが地中海の海防の要であった歴史をしのばせる。

港の突端にあるFort Saint-Jean要塞を、外観はそのままデザインした美術館と、2013年に建造した博物館とを、空中に浮かぶ一本の

橋で連結している。

空に浮かんだ橋の上から足元には群青色の海が静かに波打っており、すぐ目の前には Cathedrale de la Major 教会の尖塔と、空を見上げると丘のてっぺんにある Notre-Dame de la Garde・ノートルダム教会を同時に視界に収めることができる。橋でつながる斬新なデザインで中に入って外を見ると、アレクサンドル・デュマの小説「嵐窟王」のダントレスが投獄された土牢の島シャトー・ディフが沖に見える。

美術館の壁すべてが紺碧色のガラス張りで、外に透かして見える海が、さらに碧さを増して感じられる。

## カシ村クルーズ

午後2時からカシス・Cassisと書いてカシと読む小さな漁村をミニバンで巡る。(半日パッケージで所要時間5時間半だ。)同乗したのは、サウスカロライナから来たアメリカ人夫婦、バンクーバーからのカナダ人夫婦、そして私たちである。

カシ村の漁港から湾を一周するクルーズ船に乗る。ガイドはマルセイユ生まれのエクスマンプロバンス育ちレミさんで流暢な英語ですくっとしゃべくり、一瞬たりとも飽きさせない。ガイド料は1人80€でマルセイユ市内からの送迎つきだ。

レミさんによると、レストランのブイヤベースは80€から100€だ





けど、シンプルに魚汁（フィッシュスープで通じるらしい）を注文したなら20€ほどだ。中身はまったく同じだそう。つまり100€のビヤベースは、旅行者向けのぼったくりですと。

カシは小さな漁村で、すみからすみまで歩いて半時間でジユウブロン。漁村というより、青い海と白い砂浜が魅力のリゾートだ。フランス人もイタリア人もスペイン人も、海水浴やダイビングにやってくる。カシにMAKという日本人のレストランがあって、看板を見つけたときは、ちょっと驚いた。

マルセイユの人々の服装であるが……マルセイユに限らずフランス人は厚着を好む。ここ25度だよ！それでもみなさんダウン。レザー



コート。ウールか毛皮に裏ボア。信じられないが本当だ。しかし25度だ。カンカン照りだ。港ではワンピース一枚で裸に近いかつこうのおねえちゃんが、スケボーで走っている。

その傍で、ダウンとニットとボアジャケットの人も大勢いる。これって暑くないのだろうか？といぶかるに、それには理由があるのだろう。イキナリ突風が吹いて気温が下がることもある。そして早朝はめっぽう寒い。自衛のために防寒着を着こむのだろうか。

厚着の理由は他にもあると思う。

その朝、畳よりも大きいマットレス（ベッドのマットレスですヨ）を頭にかついで、急ぎ足で仕事に向かうアフリカ系の黒人をたくさん見た。大きな布団をくるくるとロール

に巻いて、肩にかついで移動するアラブ人も見た。マルセイユは漁港であるが、フランス最大の港湾都市でもある。ドッグに貨物船が入ると荷役がおおぜい要る。

彼らは、マットレスや布団を持参で即席の寝床をしたらえ、寝泊りしながら移動して、荷役で日銭を稼ぐのだろうか。アフリカやアラブからの出稼ぎ移民の群れに思えた。

明け方の冷え込みは10度以下だ。時に5度ぐらいまで下がる。いつでも野宿ができる防寒着とマットレスで移動して、いつなんどきでも仕事にありつくのだ。移民の常識として厚着は必定。あまりに無防備な薄着では冷気はしのげないと見える。

# Lyon

## 16 リヨン

翌朝はTGVでリヨンに向かう。

マルセイユ8時43分発、リヨン着が10時30分。

昨夜まで気温が20度前後であったが、早朝はぐっと冷え込んで10度ぐらいだ。

インチョウは、ダウンとブロックテックコートの両方を着て、ヒートテック肌着の上にニットのセーターを着ているが、それでも激しい強風にあおられて肌寒く感じる。

ちよっとした台風なみの風速であるがマルセイユでは珍しくない。ミスラルだ。

1日で気温は10度ぐらい簡単に変化



する。だからこそマルセイユに限らずフランスのどの地方でも、行き過ぎた厚着とおもえるほどの防寒着が珍しくないのだ。

リヨン駅に降りたとき、目の前をふっと雪が舞ったように思った。錯覚か？よくよく目を凝らすと、やは

り雪だ。空が曇ってきたな、と思っ間なしに空高い位置で雪片が軽やかに動くのが見えた。

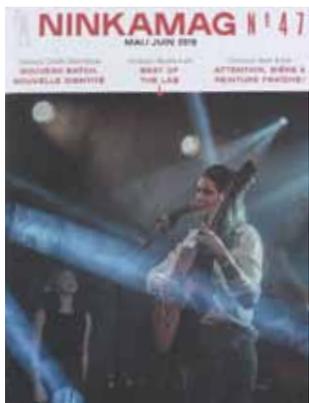
晴れているのに、天空には雪が舞う。おかしな天気であるが快晴には違いない。ここはアルプスが近い。

### リヨン美術館

リヨンの旧市街で一番の目抜き通りに Mercure Lyon Centre Beaux-Arts・メルキュールホテルはある。チェックインするや走ってリヨン美術館へ向かう。開館時間は午後の時まで。Musée des Beaux-Arts de Lyon・リヨン美術館は、フランスではルーブルにつぐ大規模の所蔵で知られる。

旧市街は川を挟んで山手と下手に





分かれるようだ。昼飯は川のそばのハンバーガーショップで食べる。そこは、ホントウはハンバーガーショップではなく、NINKASIとウィンドイスコのようなクラブ。旧市街の川べり一帯には、昼間からビール、ウイスキー、バーボンなどを出す店が、ずらりと軒を連ねている。ドイツ系の



ビールがワインを出す界限と思えたが、なかでも入口がアルコール専門店かな?と思わせる店に飛び込んだ。地元の人がぎっしりで、にぎやかにビールを飲んでいたが、入口の扉を開けて中を覗くとマスターが威勢よく私たちを奥へ奥へと案内した。





常連でいっぱいしている入り口のカウンターバーを通り抜けると、奥の土間は薄暗いが、思いがけず広々としており、土曜日の夜にはライブがでて、カウンタートーブルを脇に片付ければ、そこはディスコになるらしかった。夜通しライブ演奏で踊るらしい。そうか……ここはクラブなんだ。

メニューを見る  
と、ずらりとハンバーガー攻め。アルコール以外に食べ物はハンバーガーのみ。ところ

が、このハンバーガーが絶品。熱々の肉汁が、ものすごく美味しい。リオンはマスタードの産地であるから、ハンバーガーに、たっぷりトリオン産のマスタードをのっけて食べるのだ。びっくりするほど美味しかった。

元気もりもりは、は、は、は、は、は……そのおかげで、Basilique Notre-Dame de Fourvière・フルヴィエール・ノートルダム大聖堂へと続く長く急な石段。心臓破りの坂道を登りることができた。

この石段がこんなにハードだと分かっていたら、麓からバスで登ったと思う。ケッコウきつい。

坂の途中でおっちゃんへばった。「シンジャン（心臓のことね）が破れる〜っ！あーダメだ……死んでし

まっ〜」

「ちよっと！おっちゃん！ここで心臓発作起こしたら迷惑や。救急車呼

んでもこの坂じゃ搬送できないよ」  
実際、この勾配では急病人はしょうことなしだろっね。





## ノートルダム大聖堂

ノートルダム大聖堂から、市街のはての遠くの尾根までを一望できた。まっさらの快晴だ。

## リヨン染織工芸博物館

教会のそばに「Théâtres Romains・円形競技場」ローマ時代の闘技場遺跡)とLugdunum Musée・博物館があつて、川べりへと坂を下ると



Musée des Tissus et des Arts décoratifs・リヨン染織工芸博物館がある。リヨンはフランス最大の絹織物の産地だ。



サブリーマンが昼時と夕刻に、走りこたでは買って行くテイクアウトで夕飯にする。食のリヨンと呼ばれるが、まさにそのとおり。飛ぶように売れていく。街角の惣菜が美味しい。

## 17 再びパリへ

5月6日 リヨンからパリへと移動する。TGVのパリ行きはマルセイユからリヨンに着いたLyon Part-Dieu駅とは少し離れてる。Lyon Perrache駅だ。雪が舞うのを目にしたインチョウはおっちゃんも薄着で凍えるのが心配。おっちゃんも半そでのTシャツを素肌に着てジャージ、その上にユニクロの防水コートだ。凍死寸前でへるへる。パリはリヨンよりもさらに寒いはず。予報では最低気温5〜7度である。午前中におっちゃんの防寒着を買いにZARAに行く。

ところが、どうしたところか？売り場には夏物しか売っていない。なぜだ？こんなに寒いのに！雪模様なのにZARAの売り場は夏だ。リゾートだ。

どっかにウールのセーターとか分厚いコートは売っていないものか？と思うのだ

ればなあ」と、ベソをかいている。ZARAで夏物の綿麻ジャケットを買いました。ないよりはマシ。

インチョウの気がかりは、今日の夕刻までに『明日パリで泊まる予定のアパートの鍵を、どうやったら受け取れるのか？大家に確認すること』である。あるいはライラする。なんとかして大家に連絡せねばならない。ところが、何回メールしても返事は来ないのだ。

明日はパリ。シャンゼリゼ通りに面したアパートは、バケーションレンタルなので、部屋の鍵をどこかで大家から受け取って鍵をあけて入るシステムだ。もとより建物に入る方法すらわからない。どの建物も入り口のセキュリティは厳重だ。それなのに、まだ大家と連絡がとれない……

が、売り場のどこにもウールがない。ダウンもない。コートもない。ないない。ZARAだけではない。ほかの紳士用ブティックでも同じ。

どこにも防寒着は置いていないのだ。う〜ん。イオンみたいなショッピングモールならたぶんフロンにあると思うけどな。どこかに「しまむら」はないものか？

ですからね。日本から持ってくるべきだったのよ。セーターとコート。売ってないでしょーどこにもーほらほら！だから、あんなに言ったのに！

どうして持ってこなかったのよ！セーターは必需品だと言ったでしょ！マッタク……

このような口論のち弱気になったおっちゃんは「ユニクロのフリースさえあ

### リヨンから再びパリへ

リヨンからパリ行きのTGV。一等席はほぼ満席。車窓は見渡す限りの田園風景だ。諸所にまじるのは羊や牛の放牧である。小麦畑のところどころ一面が黄色いのは菜の花なのか？まっ黄色の布地のように連綿と続いている。Paris Gare de Lyon 駅こちら時ジャストに到着。

駅のタクシー乗り場に並んでいると、マルセイユでカシ村ツアーに同行したカナダ人夫婦と偶然にであった。彼らもパリを観光するらしい。彼らは両手を広げて私たちとの再会を喜んでくれた。「ヨオッ！」「ヘーイッ」と驚いている。



# Champs-Élysées

## 18 シャンゼリゼ



セーヌ川べりに走って、タクシーはシャンゼリゼ通りへと運んでくれた。

今日から3泊するアパートは、凱旋門の前を一直線につらぬくシャンゼリゼ通りに面した古い建物だ。ようやく部屋の鍵をうけて中に入る。古い建物らしく天井が恐ろしく高い。100年は優に経っていきそうな部屋に電気系統を次から次へとつけ足して、レンタルアパートメントに仕上がった様子で、IHでクッキングしながら、湯沸しポットをオンにして、電子レンジをチンすると、一瞬でブレーカーが落ちた。

バチッとどこかのヒューズが飛んだらしい。しかたがない。

ブレーカーがどこにあるのか？真っ暗ななかで、クローゼットの奥のヒューズを復旧する。懐中電灯もな

し。手探りだ。

徒歩3分にあるMONOPRIXで魚(にしん)、米、牛乳、オレンジ、梨、サラダ菜、白ネギ、ワインとビール2本、水、オレンジジュースなどを買う。合計35もぐらい。やはり田舎に比べて物価は少し高い。

シャンゼリゼ通りにあるMONOPRIXは日本のイオンやイトーヨーカドーみたいなスーパーで食料品だけではなくすべての日用品、雑貨、衣類も扱っている。

フランスも2週目となるとパン、ハム、チーズ、バターは、もういいかげんうんざりしてきて、私たちは米の飯と味噌汁を食べようと、午後7時を過ぎると自然に足がアパートへ

と向かうのである。

観光客相手のぼったくりレストランも見飽きたし、美味しくないし、それならスーパーの食材で、和風味な夕飯のほうが落ち着くしね。

うどんが食べたいなあ……素うどんがいいから。

MONOPRIXのレジのお兄さんが驚くほど流暢な日本語で話しかけた。奇蹟に近い完璧な日本語だ。

「日本のマンガで勉強しました。日本語は誰にも習っていません。すべて独学です」

「ガンダム」と「鋼の錬金術師」と最近は「どろろ」に熱狂している。マンガだけで日本語をマスターできるのがある。アニメオタクは本当に恐ろしい。フランスにもアニメオタクはいるのだ。

味噌汁と米と焼き魚が食べたい。  
しかし MONOPRIX にはニシンか  
サーモンしかおいていないし、それ  
らは燻製もしくは塩漬けであるから  
あまりにも塩辛い。

純和風味に醤油で食するには、しば  
らく水にひたして塩を抜く。それか  
ら焼く。それでもまだ塩辛い。

もっとホンモノの魚を食べたいよ  
ね。カレイとか鮭とか。

というわけで切り身の魚をあちこ  
ち探した。本当は鮮魚店で一匹買  
いたい、そうするとデカイ魚を自分  
でさばくような状況もありえる。シャ  
ンゼリゼの近くにマルシエはない。  
それに私たちは老人であるから切り  
身魚をちょこちょこっと、ほんの一  
切れでよい。



にあっても驚かな  
いだらう。

Picard で白身魚と  
鯖の冷凍ブロック  
を買う。

ついでに米の冷  
凍パックを買う。  
が、米は失敗だ。  
冷凍パックの米は

パラパラでカサカサのメシです。注  
意です。

これでチャーハンをつくるなら最  
高！パエリアにするなら Okay！汁  
物にいれるならびったり！でも、こ  
のまま飯として食するなら鍋で炊く  
ほうがよい。粘りがあって、もちち  
りした米が炊けます。

Picard は、なんでもかんでも冷  
凍で置いている。TV ディナーやら、



## PICARD

Picard は冷凍  
食品専用のスー  
パー。凱旋門か  
らエッフェル塔



に向かう道筋にあります。  
入り口は小さいが地元の老人たちは  
たいてい Picard をチンしているか  
ら、どんな繁華街でも探せば見つ  
かる。必ずあります。シャネルの隣

フライものなど無いものはない。寿  
司もある。

インチョウの好みはデザート。チヨ  
コレートケーキなどは、ちょっとだけ  
解凍して、ちょっとだけチンしたら出  
来てみたいにはほかほかでおいしい。

Picard はインゲン、ナス、じゃが  
いもなどはカットしてゆでて売られ  
ているので便利だ。チンしてすぐに  
調理できる。



# Arc de Triomphe

## 19 凱旋門



でてっぺんに上ることができ。もちろん階段でもOkay。ただし階段は狭くて急峻だ。  
私たちは階段の途中で恐ろしい光景を見た。うずくまっている。蒼白な唇。胸をぎゅっとおさえて汗を垂らし、ものすごく苦しんでいる。男は40歳前後の肥満体。インチョウは心筋

梗塞か狭心症か？と疑ったけれど、彼は突然、真っ白い顔を天井に向けて生あくびを始めた。かなりヤバイ！  
インチョウが『救急車呼ぶ？』と手と目でサインを送ると、  
奥さんが首を横にふり『ノー大丈夫』という視線をチラッと投げた。  
エレベーターという選択肢があった

5月7日  
せっかく近所に泊まっているのだから……徒歩3分内の凱旋門に上

る。Arc de Triomphe・凱旋門は、ぐるっとロータリーが囲んでいるから近寄れない。  
てっぺんに上るには、手前で地下道に入り入場券を買って、凱旋門の真下にひよこっと顔を出す。  
チケットを見せると、エレベーター



のに、彼らはなぜ階段を登ったのか？（あの場合、すぐに救急車を呼ぶべきです）

凱旋門、エッフェル塔、イヴサンローラン博物館は近距離だ。

エッフェル塔の入り口でまたまたあのカナダ人夫婦と出会いました。「ヘーイッー」「フオッー」彼らは「三度も出会うなんて!!」と両手をあげておおげさに驚いていました。

## イヴサンローラン博物館

Musée Yves Saint Laurent  
Paris・イヴサンローラン博物館の10  
€は高い！高すぎる！10€だ。  
高いなあ……入り口で悩んだ。  
入ろうか？入るまいか？……

でも、入ってヨカッタ。

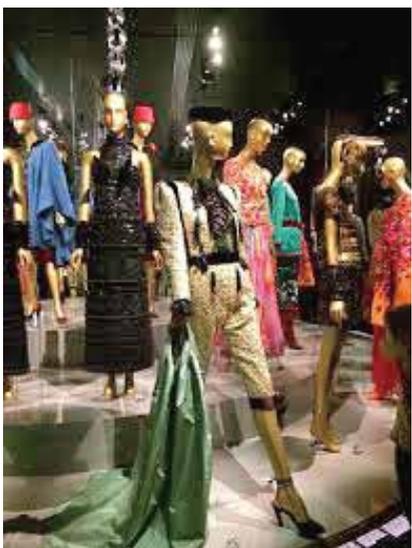
イヴサンローランの生涯の上演室  
に入って驚いた！うっ！これってマ  
ジ!?ええっ!?これなにっ!?

芸大生らしき入場者はありし日の  
イヴサンローランの映像に食い入るよ  
うに見入っている。その全員が熱心  
にメモをとる。彼らはイヴサンロー  
ランの熱烈な信奉者に思えた。

にやら書き留めている。

インチョウは、パリに来て初めて  
真剣なフランス人を見た！これほど  
シリアスなフランス人を見たのは生  
まれて初めてだ。

ファッション界はゲイの巣窟である。  
入り口のセキュリティチエックの男か  
ら、チケット売りのお兄さん、館内の  
ほつぽうにいる案内係すべてがゲイ！





## 軍事博物館

凱旋門、エッフェル塔から、そのまゝMusée de l'Armée - Hôtel national des Invalides・軍事博物館へと歩く。10分たらずだ。

アンヴァリッドは、テロや紛争でフランスのために命を落とした兵士や警察官、パブリックサービスの国葬の場所でもある。軍事博物館において開催されているPicasso et la Guerre・ピカソと戦争展。これは

デザイン学科らしき男子学生にいたっては、あれほど完璧な美形では 게이仲間が決してほっっておかないだろう。この世のものとも思えない絵から抜け出たような美男子だ。そこにいる誰もが 게이。 게이が創り出す天空の異次元がファッションなのだ。インチョウは一瞬にして体感できた。



さすがに迫力があつた。

ロダン美術館に向かう途中で小さなイタリア料理店で昼食をとる。ここは美味しかった。

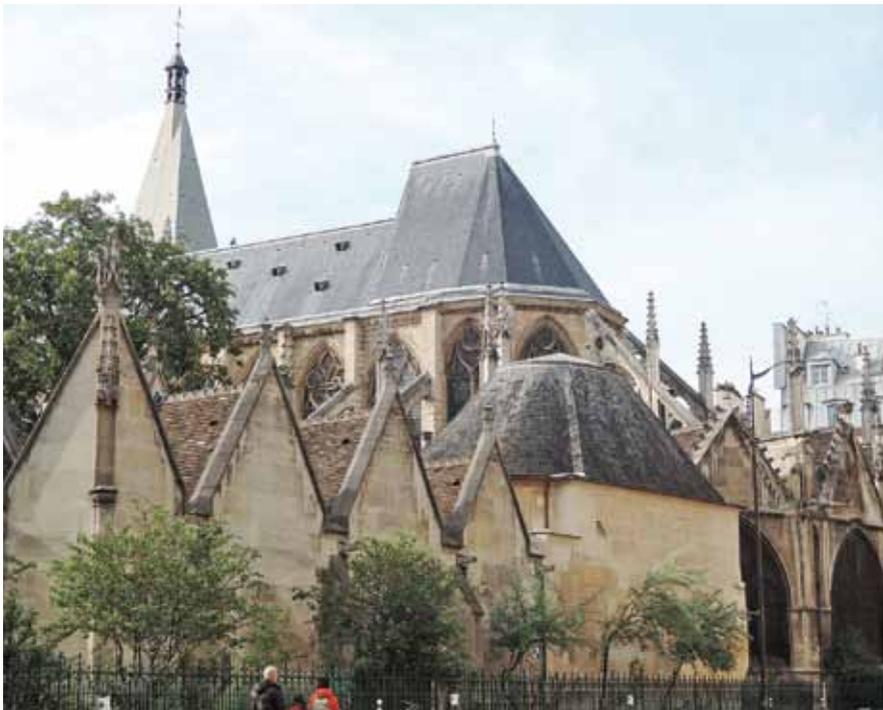
私たちが失敗から学んだことは、「絶対に観光スポットのテラス席で食べてはダメ!」ってこと。

ハイ!高い授業料でした。散々な失敗です。

美味しいレストランの見分け方は、地元の人だけが行く目立たないダイナーを探すこと。簡単だ。まずは学校の近所だ。

学校の先生も学生も日々利用するダイナーである。安いし旨い。もしくは人通りが少ない裏道にあって、地元の主婦が利用する美容室や、趣味がイマイチの洋装店、仕立屋、洗





濯屋などがある並びに、ひっそり挟まっているダイナー。

間口が狭く、見るからに貧相で時代遅れ、メニューも古くて派手派手しくないレストラン

は必ず美味しい。ぎっしりと客で込み合っている店がよい。はやっている店ほど良質だ。

私たちがアンバリッドの近くに入ったレストランは、小学校の裏口に面した小さなイタリアン。観光客はいない。地元のおっちゃん、女子学生、主婦たちでぎっしり満席。

それでも、私たちが恐る恐るドアを開けて、「2人だけOkay?」と2本の指でたずねると奥から一つの小さなテーブルを引き出して、無理



やり席をこさえてくれた。隣の席の客もわきにどけて、ようやく人ひとりが通れるほどの小さなすきまを譲ってくれた。

3人の店員は大忙しで店を切り盛りしているが、合間に近所の出前にも応じる。出前する店員が1名。奥の厨房に料理人が1名。オーダーをとる1名。大忙しで、

かつ美味。正

真正銘の地元のダイナーである。ピザとリゾットと2杯のワインで30もぐらい。こっぴりとポ



リュウムのあるデザートは生クリームたっぷりの自家製だ。

## ロダン美術館

Musée Rodin Paris・ロダン美術館は、アンバリッドのすぐ近くで庭と彫像との調和が美しい。さすが！この庭だよね……

ロダン美術館から、シルビアビーチのShakespeare and Company書店まではバスか地下鉄になる。私たちは13号線から10号線に乗り換えて20分かつらずに到着。Shakespeare and Company書店はソルボンヌ大学の近く、セーヌ川の橋のたもとにある。この書店は「ミングウェイの(A Moveable Feast)に頻繁に登場する



## Sorbonne Université

### カルチエラタン

Quartier Latin、雑踏をさけて私たちはソルボンヌ大学界隈を散策する。ソルボンヌ大学の一角に学生がテイクアウトする店で、奥にある小さなテーブルで食してもOkayという入り口が目立たない店があって、最初にソルボンヌに来た時にちょい



と目をつけておいた。ここちょっとイイな。

「ちょっと、あそこに行こうか」「うん！もう一度行きたい！」「じゃあ今から行こうよ！」という流れになって、おいしそうなバゲットと惣菜に魅かれた私たちは、ソルボンヌの校門のすぐ前の小さな店に行く。

校門の前で、まずはビールだ。大学の先生だろつか？重そうな書類カバンを足元に置いて、テーブルにコップを広げて何やら作業している。学生が別のテーブルで酒を広げている。彼らはビールかコーラかミネラルウォーターだけで数時間もあるようだ。

帰りは地下鉄。シャンゼリゼ通りのアパートの前で降りる。



## Musée Rodin Paris



## Gare St-Lazare



### MONOPRIX

MONOPRIX 食料館で水とビールとワインとバゲットを買ってアパートに戻る。

夕飯は Picard で買った冷凍まぐろと、たらを焼いて、醤油とわさびをたっぷりつけて食べる。味噌汁とタイ米の飯も美味しい。海苔の佃煮

と茶漬け。

翌朝 5月8日 私たちは列車でパリから Pontoise に行くのである。朝から米を炊いて熱々の白米とわかめの味噌汁を食べる。しっかり腹ごしらえだ。

シャンゼリゼ通りのアパートから一歩外に出ると、なにしろ、そこは凱旋門の真ん前である。くしくも5月8日は戦勝記念日だ。第二次大戦が終結して平和が訪れた歴史に残る日であるから、凱旋門では式典があるらしい。フランス国旗が街路樹に整然とたてられている。

外はえらく、ひっそりしているな。いつもと雰囲気が違う。

あっ、凱旋門前に大勢の警察官がずらっと整列しているではないか！私



たちは驚いた。けれど、警察官が多かろうが、防弾服で機関銃の厳戒態勢であろうが、私たちとは関係なし。なんかやあないと、たかをくくっていた。それが大間違い。

地下鉄のシャッターが閉まっており「5月8日戦勝記念式典のため地下鉄が閉鎖」と張り紙にある。しょうがないな。あきらめて列車の駅 Gare St-Lazare まで歩く。

# Pontoise

## 20 ポントワーズ

Pontoise・ポントワーズはひなびた田舎の駅で、下車する乗客は少ないが、ゴッホ終焉の地 Auvers-sur-Oise に行く鉄道と分岐する連絡駅でもあって、構内には接続を待つ客の姿がちらほら見える。私たちはパリへ戻る列車の時刻表を真っ先に確認する。パリへの直行列車は1時間に1本か2本だ。

駅から1本で続く狭い石畳の坂を登ると、街を一望できる丘の上にカミーユピサロ美術館がある。

ポントワーズは印象派の画家たちが多く住んだと言われ、印象派の重要な拠点であったとネットにはある

が、駅を降りて

地元の人に道を尋ねても、ほとんどの人は美術館の存在すら知らないようだ。

「引越してきたから昔のことはワカラナイのよ」と申しわけなさそうに返事をしたが、美術館への道標を見つけたのか、急いで引き返ってきて「おーいーこっちこっちーこっちに進むと美術館だよ」と大声で私たちに手をふっている。気のいい親切な村人だ。

ポントワーズの小さなレストラン



L'arbre Blanc・白い木で食事。12時少し過ぎた時刻にレストランに入ったとき、私たちがその日の最初の客であったが、30分かそこらで一気に満席となった。地元の人が普段着一斉にランチにやってきた。どのテーブルも、入り口の立看板に手描きで書かれたお薦めコースを注文している。前菜、メインディッシュ、デザートのコースになっており、それぞれを2種類のチョイスから選ぶ。



ほかのテーブルを見ると、みんなが、それぞれに違ったチョイスでにぎやかだ。店内は温かい湯気に包まれる。その日のコ

スが1人15€。

おっちゃんのおイン2杯と合わせても2人で44€だ。隣席の夫婦はわざわざ私たちの席に身をのり出して私



ちに、フランス語のメニューを一通り英語で解説してくれて、ウエイトレスの女の子にフランス語でオーダーを確認してくれた。

少し遅れてやってきた大学生の息子さんも私たちと合流した。彼は日本アニメ「進撃の巨人」のファンなのだという。

そのあと1時間ほど列車に揺られてパリに戻り、そこからアラブ世界博物館、キュリー研究所とキュリー



*Pontoise*





Musée du Cluny



には、このときを含めて5回ほど足を運んだことになる。  
表通りから一つ裏に入ったソルボンヌの路地はとても心地よい。昼ひなかでも、ひっそりしている。  
Musée Curie・キュリー博物館は、その路地のひとつにあってキュリー



### クリュニー美術館

そこはソルボンヌの構内といえる

博物館、さらにソルボンヌ周辺を散策してクリュニー美術館へと歩く。

ほど大学の至近にある。ローマ時代の遺跡を美術館の内に擁して、すぐ脇の公園からもその遺跡を眺めることができる。

公園には、老人たちがベンチにこしかけて長い時間じっとしている。インチョウが話しかけると、彼らは帽子をチョットもち上げるしぐさで会釈を返して写真を撮らせてくれた。なんと驚沢な時間だろう。

Musée du Cluny・クリュニー美術館は「La Dame a la Licorne・貴婦人と一角獣」のタペスリーで広く知られている。館の敷地の遺跡をそのままガラスで囲って館内へ取りこんで、美術館の地下と遺跡がそのまま通じている。

ソルボンヌ界限、カルチエラタン



夫妻がラジウムの発見に使用した当時の実験装置を展示している。

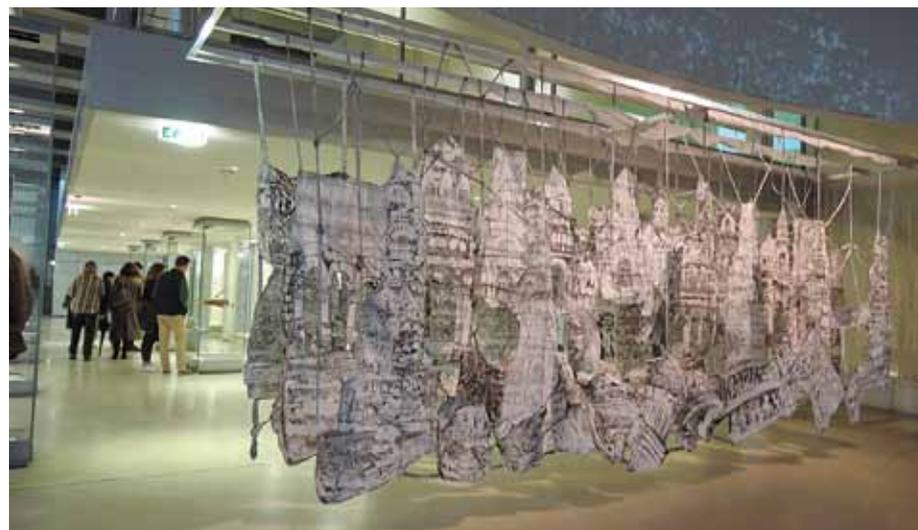
## アラブ世界博物館

アラブ世界博物館 (Institut du Monde Arabe, Le Musée de l'IMA) は7階から上が博物館になっていて、途中階は図書館だ。セーヌ川の河川敷にあってノートルダム大聖堂のすぐそば。Sully橋のたもとにある。

アラブ世界博物館はひよわなフランスの文化に厳然と挑戦状をたたきつける異界だ。アラブ世界は圧倒的なエネルギーを、白日の下、我々の前にあばきだす。

いつのまにかフランスの蒼白い感性に慣れてしまうと、完膚なきまで

# Institut du Monde Arabe



に对極にある強烈な太陽に魅かれるものがある。

夕飯は朝炊いた残り飯を醤油とバターで炒めたチャーハン。白ネギを刻んで冷えた白飯と炒める。

味噌汁とポレポレのポテトサラダ。おっちゃんには醤油バターチャーハンが特別のお気に入り。

夕方8時過ぎから雹が降った。窓に激しく叩き付ける雨音でバルコニーに出ると、驚いたことに外は雹の嵐だ。パラパラとふきこんだ雹が、しばらく溶けずに窓枠に残っ

ている。外は寒い。

このシャンゼリゼ通りのアパートはエアコンがない。夏には恐ろしい暑さであろう。その意味で5月はエアコンなしで過ごせる最適の季節かもしれない。ここは1800年代の建築だろうか？内装だけを改装したバケーションレンタルであるから電気配線が頼りない。エレベーターはあるにはあるが、かなりの年代物であり、大理石の螺旋階段のほうがよく、堅牢な造りだ。こんな付け足しの電気配線ではエアコンなど思いもつかない。

5月8日は戦勝記念日。テレビでは第二次世界大戦当時のフランス各地のレジスタンスの映像を特番していた。



# Montmartre

## 21 モンマルトル

モンマルトルの丘 (Montmartre) に登る。シャンゼリゼ通りから地下鉄1号線で Concorde 駅から12号に乗り換えて、モンマルトルの丘は地下鉄駅 Abesses 下車。

徒歩でも頂上まで登ることはできるが、ここは、せひとも Funiculaire・ケーブルカーがヨロシイ。フニクラフニクし〜……

というのも、地下鉄 Abesses 駅から地上出口までの階段。これ、かなりキツイ。急峻です。細いです。心臓やぶります。

およそ5〜6階建てのビルを急勾配で駆け上がるような按配で膝がガクガクする。パリの地下鉄にはエレベーターはめったにない。ところが Abesses 駅にはエレベーターがある。そして乗客のほぼ全てがエレ

ベーターで地上に出るのだ。私たちは知らずに階段を上った。

ですからね。モンマルトル頂上のサクレクール教会まではケーブルカーにしましよ〜ねと、ケーブルカー駅をめぐって歩く。

### ケーブルカー

ケーブルカーは、地下鉄のチケットで Okay. 18€。

雨は降っていないかった。曇り空だ。ケーブルカーはガラガラにすいており、客は私たちのほかに中腹の駅で下車した係員の2名だけ。

ケーブルカーは数分おきに発車するが、観光客はみなケーブルカーに上る階段を上るらしかった。ところ

がっ！おっちゃんといんちヨウを乗せたケーブルカーが動き出して〜2分のうちに空模様は一転する。

一天にわかにかき曇り、激しい豪雨となって雷鳴が轟く。雨水がごつごつと音をたてて滝のように急な斜面を流れうつ。私たちの乗ったケーブルカーのガラス窓にも雨滴が斜めに叩きつける。

「ぎゃ〜……っ〜」と、みなが一斉

にケーブルカーめがけて走り寄る。

山頂で私たちがケーブルカーを降りるや、数分のちに雨はやんで眼下に青空が広がった。モンマルトルの丘の上だけに見られる集中豪雨らしかった。かくにパリの空は気まぐれなのだ。マッタク……

パリ市街を一望できる高台に、Basilique du Sacré Cœur サクレクール教会がある。高い梁のあるステンドグラスが美しい。

### モンマルトル博物館

サクレクール教会から5分ばかり石畳の坂を下ると、Musée de Montmartre Jardins Renoir・モンマルトル博物館ルノワールの庭がある。サクレクール教会の混雑がうその



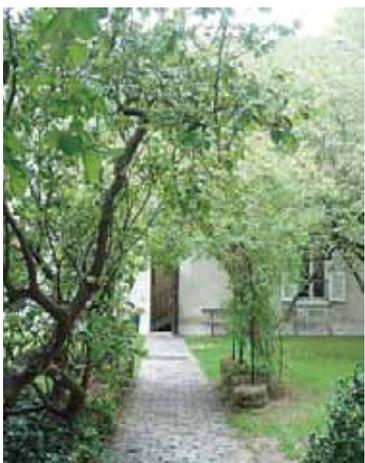


ように、ここはひとけがなく静かである。なぜ？ひとけがないのか？

12€の入館料が高い！バカ高い！と感じさせるほど、粗末な狭い入り口で、錆びた鉄の扉も貧相で目立たない。そのため（なーんだ、古びた汚い屋敷じゃないか……）と素通りする観光客がほとんどだ。違います！そんなことはアリマセン！

た貴重な映像である。

中庭を囲んでコの字に建つ木造3棟のすべてに、ぎっしりと資料や絵画が展示されているほか、Georges Dorniacの特別展があった。木の階段が激しくゆがんでいる。上るにつれ、みしみしと音を立てる。傾斜が妙にアンバランスで、インチョウは体が後ろに傾くのを感じた。「おっちゃん、この階段、ひょこ



ここはホントウに美しい。

入り口で12€を払って鉄の扉をくぐるとそこは別世界だ。モンマルトルが、若かりし日のモンマルトルのまま、密かに息づいている場所。室内はモンマルトルで育った画家のアトリエで、画具もイーゼルもそのまま。一階では当時に撮影したフィルムが上映されている。2つの大戦を挟むモンマルトルの移り変わりを写し



して傾いてる？」  
「うん。ものすごくゆがんでいる」  
庭はあと数週間で一面の花盛りであるう。つぼみがほころび始めている。石畳の坂をガラスごしに眺めながら、画家たちはなにを思い、なにを描こうとしたのか？  
彼らもこの窓辺にたって、この庭を眺めたのだろうか？あれから、この部屋は100年を経た。  
博物館の庭の一隅にあるガラス張りの東屋。もともとは、簡素な東屋だったのか？それともガラスの温室だったのだろうか？ぼちぼち休憩。カフェオレと、ワインと、キッシュ(80€)で昼食をよむ。



食事の途中で雨脚が強まり、ガラスの天井から雨滴がたたって流れ続けたが、すぐにあがって、私たちが

## Musée National Picasso-Paris



カフェを出るころには、ピカピカの青空が顔をだした。  
そこからピカソ美術館まで、地下鉄4号から13号に乗り換えて30分ぐらいだ。

### ピカソ美術館

Musée National Picasso-Paris・

ピカソ美術館は想像以上に美しかった。

まず館自体が美しい。ピカソの作品をこれでもか！と展示しているのだが統制がとれている。館の雰囲気と作品の配しかたに透徹たる均整が窺われた。

ピカソは、あくまでもピカソとして魅せねばならない……

ピカソは、時空を超えてピカソたら



ねばならない……

そうだったピカソ礼賛が、隅々まで調和を強いており、それは館に入った瞬間から出口まで一条の倫理で貫かれている。

ピカソ美術館が私たちの予想をはるかに凌駕した理由は、もう一つ。町全体のアートな雰囲気にある。

ここマシ地区に軒を連ねる彫刻、陶芸、絵画、どの店も派手な看板はなく地味ななりで、ガラス窓越しに奥をのぞき込んでようやく（あ、ここにも作品を置いているな……）と、そこが画廊であることに初めて気がつく。

ピカソ美術館を訪れて、ああヨ Катタ！と思う。それは、この町に根をおろした芸術家の厳しい審美眼からくるウィットのかいた抑制に



よって創られた独特の雰囲気を感じる。

シャンゼリゼに戻ったのが午後6時ごろ。インチョウは、その足で MONOPRIX に土産を買いに走った。本当は MONOPRIX ではなくて、その並びのギャルリールファイエットで土産を買う予定でした。

## ギャルリーラファイエット

ギャルリーラファイエットの地下には、ため息が出るほど美しいチョコ、マカロン、ケーキ。そのほか、センスのよいテイクアウトの惣菜、ワイン、チーズなんでも売っていて、真ん中にある大きな木のテーブルに座れば、目の前で調理された惣菜を、ワインや紅茶と一緒にオーダーすることもできる。

トッテモおしゃれ。うっとりする。(最終日に土産を買うならゼットイにここだっ!)と、初日に下見しておいたので、インチョウは迷わずギャルリーラファイエットに走った。ところが……ダメだ……ヤクメタッ! 手のひらに乗るほど小さなチョコ

1箱で200€! 小粒のチョコが9個しか入っていないの?! マカロンが最小6個入りで25€。中サイズの箱12個入りなら50€。

ダメだっダメだっ! うちのスタッフが1人につきマカロン半口、チョコ3分の1かじりでも軽く2万円超だ。

インチョウは、ギャルリーラファイエットをあきりめて、隣のMONOPRIXに駆け込むと、1箱1,527€なり! のチョコシートを1万円ぶん買いました。この重量! MONOPRIXの買い物袋は、やぶげそうにすっしりと重い。は、は、は……こっちのほうか、よっぽどイイ! チョコレート攻めだ。

重い土産袋をひっぱって、タクシーに乗りこむとシャルル・ド・ゴール空



港に向かう。タクシーはパリ市内から空港まで、ほぼ50€。1時間ぐらゐの距離だ。空港のすぐ前のホテル Holiday Inn Express-Paris-CDG にチェックイン。

明日は帰国便に乗る。午前11時20分発だ。

シャルル・ド・ゴール空港の真ん前にホテルが続々と建設されており、空港周辺はちゃっとしたホテル街だ。私たちの部屋からも飛行機が離発着するのが見える。

搭乗ターミナルへは、ホテル前の地下鉄(シャトルラム)に乗れば数分。すぐだ。シャトルラムは4分おきに動いている。

朝ゆっくり寝ていた老人にとって、このホテルはぴったりのロケーションだ。14時間のフライトで台北を経由し翌日の昼過ぎに帰宅した。

お疲れ様でした……

明日から、またお仕事です。頑張ろう!





日本に戻って……

自宅に戻ったのが午後1過ぎ。まずポーの様子を見てから、ほかの猫たちにも挨拶する。よしよし、みんないい子たち。元気でヨカッタ。スーツケースを片づけて洗濯を干すと、おっちゃんは早速シーツの整理だ。

この旅行でいくらかかったのか？おカネの計算をしている。

飛行機代が2人で35万円。

ホテルが17日間で25万円。

ガイドつきのマルセイユとムーランルージユが18万円。高い！

もっと安いパッケージツアーは探せばある。安い航空券もある。日程さえ選べば旅費をぐっと下げることができる。ホテルも予約するタイミングで値段を下げることはできる。経費を30〜40万円下げるとは簡単だと思う。

それに今回のように毎日美術館に出かけて外でランチしたら20万円は余計にかかるだろう。それらを差し引いて考えれば、パリで、ひとつの場所にステイして、派手に外食しなかつたら100万円以下で、2人で1か月は余裕で暮らせると思う。2か月でも大丈夫。問題ない。長期ステイなら自炊するにせよ、食材が使いまわして無駄にならないからね。

田舎ならもっと安い。2人で2か月

20以上の美術館の入館料が2人で5.7万円。18日間のスーパリーの買い物3.2万円。

レストランなど外食代が9.2万円。TGV特急料金と地下鉄など乗り物が5.2万円。

タクシーが3万円レンタカーが4万円ほど。

海外旅行保険が2人で1万円。全部で100万円ぐらいかなあ？

おっちゃんは叫ぶ「あーダメだ、オレ気絶しそうだ！」

インチョウは「今までHISの10万円以下のパッケージツアーしか行ったことがないから高く感じるけど、内訳をよく見たら、それほどでもないじゃん？」

「これ、フツウだよ。こんなもんじゃないのかなあ……」

60〜70万円もあれば余裕だ。

でも大事なことは外国に滞在して何をしたいのか？海外に何を求めるか？だと思う。漠然とでもよい。何か目標があれば、ジューブン楽しいと思う。

健康に決定的なひびが入るまえの60代前半に構想を練って、60代中盤でトライして、60代後半までに海外に長期ステイできればイイと思う。

昨年ようやく、老親の長い長い長い介護を終えて、最後の父母を見送った。介護も子育ても、いつかいつになつたら終わるのか？果てしなく永い道のりに思えたが、子供たちは30代。めいめに独立して、孫たちはずいぶん大きくなった。

私たちは今までずっと休まずに働いてきたのだ。そして迎えた60代は、人生の最終章を飾る黄金の時間ではないだろうか？

70代には、まだ少し間がある。

## 持っていくもの

日本から持って行って正解であったもの。

醤油パウダー、粉味噌、フリーズドライ白飯、フリーズドライ味噌汁、鰹節、おかかふりかけ、乾燥わかめ、チューブ入り練りわさびと生姜、日本茶ティーバッグ。真空焼き魚がありがたかった。海苔の佃煮と、うどんの乾麺があれば、なおさらヨカッタと思う。

## 服装について

おっちゃんといんちヨウは、日本では、ほぼ全身ユニクロだ。パリでもユニクロ。ユニクロのヒートテック肌着、ブロックテックコート、ウルトラライトダウンは軽くてかさばらないし、防寒防水機能が完璧なので役に立つ。

大事なのは靴である。靴がちゃんとしていないと、にわか雨や突風やらに攻めまくられるパリを安心して歩けない。レッドウイングのショートブーツと、スニーカー、夕食にドレッシングスアップするときは、黒のスエードのミドルブーツ。

色調であるが、おっちゃんといん

ちヨウは、紺、黒、白、グレー、ほぼこのパターンであって基本は無地。柄物や色物はほとんど着ない。

パリでは、5月の寒い時期であったためか？たいていの人がモノトーン。黒かグレーかベージュのコートにセーターだった。私たちも同じくモノトーンのコートとセーターだ。

ところが、マルセイユへ南下するにつれて、街の装いはどんどんカラフルになった。色鮮やかな民族調が目立つ。なので、ビビッドな色のワンピースは、一つは持っていくといいと思う。

傘は必需品です。パリでは、どの人も折り畳み傘を携帯している。傘を用意していない人を見るとインチヨウは品格を疑う。

ガイドもパッケージツアーも要ら

ない。自分の足で歩き、自分の目で見えて、そして道に迷ったら地元の人に尋ねて助けてもらう。地下鉄もパスも、使いこなすほどに町の理解が深まる。

パリは地区によって、まるで雰囲気が違う。駆け足で名跡をたどるパッケージツアーでは気づかずに過ぎてしまうパリの微妙な表情が、徒歩でこそ見えてくる。

歩かないと、話さないと、それは見えてこない。パリの人たちはとても親切。丁寧に応じてくれた。そうやって本当のパリがつかめるのだ。

## 連泊のススメ

同じ宿に連泊するのがイイ。

老人の旅であるから、連泊したほう

がカラダに楽だ。明日の予定がないときは朝ゆっくり寝る。たっぷり寝る！これが長期戦の秘訣だ。

そして夜7時には自室に戻って夕飯を作って食べる。夜歩かず自室で食べるというパターンを守って行動すると疲労が残らない。規律は大切だと思う。

今回の旅は、キッチン、洗濯、乾燥、そういった設備がついたアパートで自炊できてずいぶん助かった。ホテル住まいだと電子レンジすらない。湯沸しすらなかったなら長期戦は厳しいと思う。キッチンはあったほうがイイ。

## 旅行前に健康診断を

インチョウのように出発直前に腎臓結石が発見されて、救急で腎結石

を押し流す！というような駆け込み受診はお薦めできない。持病の管理は平素より心がけるべきである。そして歯の治療もしっかり。歯が悪くては心もとない。

## ペットの世話

黒猫のポーは、私たちの出発の前日に尿管結石で入院することになった。うちには、ほかに4匹の猫がいて、彼らの世話はスタッフの杉浦さんをお願いしている。ありがたいことに、杉浦さんはポーの容態にずいぶん気を遣ってくれた。ペットの世話を外して海外旅行は語れない。



# 22 旅のおわりに

## パリを旅行する前に考えたこと

2019年4月末から5月初旬は、新天皇が即位する儀式にあたり、ゴールデンウィークが10連休となった。そんなに長期の休みは人生で半世紀ぶりだ。

おっちゃんとインチョウは、「医院も休むしかないなあ……」「えらい、ひまやなあ……」「10日間も、ず〜っと休みか……家で何する?」「せんない会話ののち

「いっそのこと海外へだけよう!」という流れで「よしっ!行くぞ!」とフランスに決めた。

ゴールデンウィークのフライトは割高であろうから、連休の前後を大きくはずして、連休が始まる5日前から出発。連休が終わって5日後に帰国。というようにチケットが割安な日程を組んだ。

フランスに決めた理由は特にない。「フランスにしか?パリはどうか?」「う〜ん、それがいいかな」というような、いいかげんな流れにより、フランスで18日間(正確には

16日)を過ごすことになった。

さて、インチョウは、いま荷造り作業中である。持ち物を選ぶうちにインチョウの心の中で固まってきた思いがある。

一つには、フランスでは、その地でフツウに暮らしている人々の生活を、まぢかに見て、どんな暮らしぶりなのか?知りたいと思う。

地元の惣菜だのパンだのバターだの普段の食材を買ってアパートのキッチンで調理する。ジャムも、菓子も、ワインも、パリの人が日々食べているものをスーパーで買う。私たちもパリのフツウの暮らしを体験しよう。そう考えた。

二つには、パリでは、徹底して普段着で過ごす。おめかしはしない。

さて、三つめである。

シニアのあり方を考える。まずはパリのシニアのフツウの暮らしを観察する。さらにシニア旅行者を観察しよう。まさにパリはうってつけだ。世界中から老若男女が集まる場所である。そして「シニア向け旅行ガイド」を書く。これが三つめの目標である。

以上は、出発前夜の4月23日の記であるが、果たして実際はどうであったか?当たっていたところもあるし、思いどおりにいかなかったところもある。

しかし、その先の海外長期ステイへと最初の一步を踏み出した。海外

で暮らすときに大切な、なにがしかの手がかりは得たと思う。それが、少しばかりの知恵であったとしても、これから連綿と紡ぐ夢の端緒であることには違いない。

ひとつ前に踏み出したのだ。すべては、パリから始まった。

2019年5月16日 に記す。

大橋永美

## 23 後記

帰国して、しばらくした6月。ヘミングウェイの「A Moveable Feast」を読みかえしてみた。

彼がいた1920年当時と、ほとんど変わらないなと思えるパリが今もある。それが何なのか?凡そ100年を経てなおパリが魅了するものがあるのか?しっかりと自分の胸に確かめて来なかったなあ。と残念に思

うこともあってか、私たちは早々にパリに行く計画を立てている。

パリは年に3回行ってもいいなあ……おっちゃんはつぶやく。

私たちは帰国してすぐに、またパリに行きたくなっている。パリを訪れたどの人の胸にもそういった感傷と軽い悔恨を残すのだろう。たぶん、それがパリなのだと思う。





「放浪記」で知られる作家、林芙美子は昭和6年へミングウェイがパリを引き揚げた10年後にパリを訪れている。

昭和6年といえば、柳条湖事件のくすぶった火の粉が満州事変へと飛び火して日華の情勢は一気に上海事変へと暴走する、まさに火種の時期である。国境での小隊の小競り合いが、いつ紛争へと拡大してもおかしくないキナ臭い状況で、芙美子は11月4日東京駅を立出た。

下関から釜山、ハルビン、モスクワをへてシベリア鉄道を乗り継ぎパリ北駅に着いたのが11月23日。およそ20日間の旅である。11月13日には、空中で炸裂する鉄砲の地鳴りのような音を終日耳にしている。ロシ

アとの国境では車両ごとに銃剣を前にした嚴重な検閲もあって広大な大地のどこかしこに小規模な戦闘が身近にある緊迫した時期に、たった一人でシベリアを横断してパリ、ロンドンを訪れるのである。

パリには、途中に約1か月ロンドンに滞在した期間を除き、4か月あまり滞在している。帰路はパリからリヨン、リヨンからマルセイユまでを列車、マルセイユからは船旅でナポリへ、そしてスエズ運河を経て神戸港まで30日ほどかけて帰国の船路をたどる。

芙美子の巴里での日々の買い物と値段をメモした手帳を読んで、ちょっと驚くのであるが、私たちがたいして変わらない日常だ。値段も！

ユニプリ（安売りのスーパー）で食材を買って自宅で米と魚を料理す

る。ルーブル美術館やロダン美術館ほかモンパルナスやモンマルトル、凱旋門、カルチエラタン、セーヌ川ぞいのカフェ、ムーランルージュや印象派画家のアトリエなど、ほうほうを訪ね歩き、パリ市街から距離のあるバルビゾンの田舎ではミレーの生家を訪れている。彼女はすべてを下駄で歩いたのだ。

当時、パリに留学していた日本人の集団に飛び込んで、彼らとの交流を日本へ通信する。パリで活動する同胞との交わりに慰められ、ときには疎ましく思い、煩わしさに嫌悪すら感じるなかで芙美子は「ああ、いい仕事をしたい」と日記に念じ続けている。これはヘミングウェイの「A Moveable Feast」に書いても頻繁に記されることがらであり、「自分が

納得できるよい仕事をしたい」と凍りつく夜気のなかで机に向かう。自身のナシヨナリティーとアイデンティティーを確かめるためにも、芙美子はパリにあつてひとり自室にこもり、ヘミングウェイはカフェに居座ってひたすら原稿用紙に向かった。彼らの文体はそつやつて確立されたと思う。

アメリカ人はアメリカの文学を、日本人は日本の文学を、自身のものにしようといかに向かう。彼らには、その場所がパリであった。

ちなみにヘミングウェイはパリにあつては、故郷を回想することが多く、林芙美子においても、出版社から依頼された欧州の紀行文をのぞけば、書き綴るのは日本のことばかりだ。……なるほど。パリに来て自国のことを明確に分析できる心境に至る

のであろう。彼らの根っこはしっかりと自身の国にある。

逆もしかり。離れるほどにパリは心に近くなる。

ヘミングウェイがパリを回想して“A Moveable Feast”を完成させたのは1960年以降、パリ滞在から30年を経た晩年である。

“If you are lucky enough to have lived in Paris as a young man, then wherever you go for the rest of your life, it stays with you, for Paris is a movable feast.”

Ernest Hemingway

A Moveable Feast

おっちゃんと言チヨウは、日本人であれ、外国人であれ「いい仕事をしたいがためにパリで頑張っている人」にまるで出会わなかった。そのことが宿題として心に残った。

旅の途中に出会った日本人は、みな骨のない新世紀のヒトであった。自身が日本人であることを世界に誇れるような生き方はしていない。彼らは、ただ、少しフランス語がしゃべれるという理由でパリにいる。

パリで出会った日本人の誰もが、日本人特有の強烈な体臭を失っており、私には空中に漂うカスミのように無臭で、泡沫のように気の抜けた存在に思えた。明治から昭和にかけて日本人が世界に放ってきた強靱な気骨は、いまは中国、韓国、他のアジアの民族にとって代わられて、日本という個

性が消えてしまったように思える。

林芙美子は、パリの宿で米を炊いていくらをぶっかけて食べる。ユニプリで買ったほうれん草や鱈で白米の飯をかき食らう。書けない。書けない。と苦しみながらパリでひたすら原稿に向かう姿はたくましい。

たった一人でもいい。こんな意気地のある日本人に出会っていたなら、私たちの旅の思い出はもっと鮮明に形をなしたと思う。ずしりと重い感慨を残したと思う。

私たちは、目の玉が飛び出るほどぼったくりの似非ミシユランガイドにも騙されず、名ばかり立派なフレンチレストランにも連れ込まれずに済んだ。派手な店構えのシャンゼリゼのブランドショップの爆買いとも

無縁に過ぎた。自分たちの眼で、舌で、感性で選んだ手ごたえのある店だけを、いいも悪いも判断できた。このことは幸運であったと思う。

次に長期ステイするときは、どの国籍の人でもいい。なぜ？パリで生きるのか？誇りをもって答えられる人に出会いたいものだ。たった一人でもいい。胸を張って答えることができる人と話したい。

私たちは、この先パリで長期ステイできるだろうか？と、しばしば話し合っただけで、パリで何をしたいのか？何を成しとげられるのか？それが見えてくるのか？こないのか？それはパリで誰と出会うか？一期一会にかかっていると思う。



著者

大橋永美(おおはし えいみ)

1956年生まれ

医学部卒業 大学院博士課程修了

耳鼻咽喉科専門医

1998年より耳鼻咽喉科医院を開業



---

#### 参考図書

A Moveable Feast; Ernest Hemingway, 1964, arrow books.

今川英子編 「巴里の小遣ひ帳1932年の日記 夫への手紙」

林芙美子 中央公論社

立松和平編 「林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里」 岩波文庫

---

### おっちゃんといんちョウのフランス旅行

2019年11月3日 初版第1刷発行

著者 大橋永美

発行所 新星出版株式会社

〒900-0001

沖縄県那覇市港町2-16-1

TEL 098-866-0741

FAX 098-863-4850

---

© Ohashi Eimi 2019 Printed in Japan

